
神様の事情

S K

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

神様の事情

【Nコード】

N7758A

【作者名】

SK

【あらすじ】

主人公の過去、神の女の子の過去、その繋がりが生む他のキャラクター達との出会いと別れ……その後続く長くて絡まりあう物語は戦いあり、家族の絆あり、爆笑……あり、謎あり、涙あり、恋愛騒動ありの、ファンタジー風味の物語。

プロローグ 始まりの日

『神様』……………世界で信じている人がどの位いるか分からないが……………今、この地球には神が存在する。

18年前……………この世界に神がいることが分かった。

それは『ある事件』がきっかけなのだが…今、その話はやめておこう。

神の存在……………明らかになったのは18年前だが、正式に政府が公表したのは3年前。その間の15年は日本で見付かった神を世界各国に伝えたり、神と戦う準備をしたりと混乱を避ける為にあけた15年間。

とにかく3年前、世界同時放送で神の存在が証明された時の映像がこれだ

赤いカーテンのかかったスタジオらしき場所が映り、カーテンの中から40代前半に見える女の人が出てきた。微かに見えたカーテンの中で、鼻血出して倒れてる人がいたような……………

『はあ〜い みんな元気にしてるかにや〜？ 今日の世界の皆さんに大、大、大ニュースがあるんですよお〜』

すごいハイテンションで画面に映ってる女の人は、世界同時放送にも関わらず服はスーツ……まではいいが……頭には猫耳を付けていて『これしか許してもらえなかったのよぉ……ぐすっ』なんて言っています。……たぶんあれもダメだったんだろっけど、蹴り飛ばして出てきたんだろっな……出てきた時、通った場所に血がついてるよ……

この放送のあと普通の抗議の電話と同じくらいに、オタク達やマニア達からも抗議の電話が殺到したのはあまり知られてない事実。

『……とにかく!! 神様はいます。 さあそろそろ放送終了時間も迫ってきたので、ここでゲストに来ていただきましょう!! 神様の登場でえっすっ』

そう叫び終わると、カーテンが左右に開いて真ん中に中学生位の女の子が一人立っていた。

『おくと!!?!? 予想外にも私より可愛い女の子が来てしまいましたぁっ しかも若い……ムカつくので捻り潰しますねえっ』

そう言うとアナウンサーの『おばさん』は無謀にも神様と呼ばれた女の子に近付いて行き……

キーン……

見事に氷の固まりにされました。

その氷の固まり（アナウンサーの『おばさん』）の横を通ってカメラに向かって女の子は言いました。

『どうも、神様と呼ばれるのはなれてないのでルキと気軽に呼んで下さいね』

と、普通に挨拶をすませる……おかしくないか？ カンペを見て

『えっ？ この説明読んでくれ？ は、はい……神様は人間とはあまり変わりなく違うのは住んでる場所、かつこ神界かつこ、と記憶力、魔法が使えること、かつこ人間でも憶えたければ魔法は使えるようになるかつこ』

てか、かつこまで読んでるよ……（天然かな）

それに、女の子が一生懸命頑張ってる姿を見て、世界のオタク達は、萌えていました。

このあと、ファンクラブが出来たのは結構知られている事実である。

『それではこれで世界同時放送を終わりますね。あつ！信じられない人のために少しサプライズがあるので空を見てくださいね』

神様の事情

そう言い終わるとカメラが引いていって終りの文字が画面に映る

と、周りの文字のない場所で土下座して『ありがとう』で泣いている人が結構いたのが少しだけ映った。

そのあと空を見ていた人達は『天空の城』を見た。

よつするに浮かんでる城がたぶん結界から出てきたのだろう。

その数は今、発見されているだけで約一万……

それから3年たって、日本は世界から監視をつける国になってしまふ。

なぜか日本には神が集中していたり、神界への入口があの広いアメリカやロシアの何倍もあるので日本に核を撃とうとしている国もあるぐらいだ。

神達の犯罪にたいして新しい組織も作られたりしているが、日本は今、危機的状況にある。

都庁2の地下会議室

カチ、カチ、カチ、カチ。

何かが開いたり閉まったりしている音。

「……う……うるさいぞ……！ 会議中ぐらいそれをやめたらどうだ!？」

我慢も限界にきたのかキレた男は横にいる音の元凶の男からライターを取り上げる。

「なに、そんなにイライラしてはんの」 そんな怒らんといてえ」

「黙れ……………これ『ぶっ壊すぞ?』」

その言葉を聞いた途端、部屋の中の空気が氷ついた。

その殺気は、部屋の外にいた二人の女性まで凍らせるような冷たいもの。

それを見ていた人物の溜め息が奥に座っている席から聞こえると、女の人の声が出た。

「やめなさい。それくらいにしないと、『アレ』よ?」

その声には二人はビクツとて一人はライターを返して、一人は嘘のように殺気をなくした。

「じよ、冗談やんか大将 なっ?」

「あ、ああ……………」

いったい何なんだ……………この二人がビビったぞ。

「まあいいわ……………二人とも……………ここに来た理由ぐらい分かるでしょ?」

その問いに二人とも顔を曇らせた。

関西弁じゃない男は沈黙をやぶり話だしす。

「そうですね……あの子にはまだ少し重いでしょうから……」

「支えが必要やな……まあこれでも関西代表やから、まかしとき
関東の代表さんもそこはOKなんやろ？」

関東代表と呼ばれた男は反論もいれて答え始める。

「仕方がないですからね！ あの子の親には借りがある……手伝わ
ないわけにはいかないでしょう。それと……私は関東代表になった覚
えはありません！！」

また睨みあう二人を見て溜め息をつきながらも、止めにはいる。

「や・め・な・さ・い！ あなた達は猿以下！？ 同じことなら猿
だって言われりゃしないわよ！！」

神様の事情

軽く落ち込む二人を見ながら、テーブルに置いてある二つの写真
に目をやると、普通の少年と普通の少女が写っているだけ。

少女の写真は少し古く感じたがたいした問題ではないだろう……

この三人もそれぞれの想いがある。

関西代表の男は男の子の写真をクシャクシャになるまで握り締め
て。

関東代表の男は胸のペンダントを握りしめ。

女は誰かの名前を心に刻む。

(クリス……………)

それも始まりの一つ。

「この二人も、大切なモノを見付けたらもつと素敵になるわよお」
原石っていいわよね」

この女の様子に二人の男は心の中で密かに思う。

(食べる気ですか……………)

(食うんや……………)

このあと外で戦っていた二人の秘書が悲鳴を聞いたと語っていた。

公園

同じ時間、都庁2近くの公園に光の柱がふりそそぐ。

地表には光の線が伸びて魔法陣が描かれていく。

出来上がると同時に鉄のように見える扉が現れて、その中からフードをかぶった人が出てきた……

顔はよく見えない……

「……………ここがそうなのかな？」

辺りを見回す。

声は少女のモノで優しいが少し怯えた声だった。

それと不思議なことに雨は少女を避けて降り続けている。

「……………でも、なれるまでは時間がいりそう……………うん……………わかってる」

雨の公園。

歩き出した少女。

雨は少女を避けて降り続いていた

神様の事情

神様の事情

プロローグ 始まりの日(後書き)

プロローグ、かなり修正しました。

第一話 大切な『モノ』

何も変わらない毎日、時間だけがただすぎていく。

この世界はなにも変化はなく、ただ同じことを繰り返す。

それがすごく嫌だった……

誰もそれを考えない考えることすらやめていた。

そんなとき

神の存在が明らかになる。

ずっとつまらなかった世界におもしろさがでたんだ……だからもう少しだけ生きようと思った。

夏、太陽が眩しく輝き。

プールでは客も多くて大変な季節だ。

それなのに俺は……

「言ってることが分からないか!? 授業は聞いていない! お前
いったいなんのために学校に来ている!?!」

教師の説教だ……まあもうなれたけど。

この教師は桜木 浩二。

まだ若いから自分の不満は全部、生徒のせいにする、いわゆる自己中とゆう奴だ。

(それにしても……職員室ただでさえ暑いのにクーラーつけるよ、
せっかく涼しいところできつるげらと思っただのに)

まあそう思つて、心の中で考えてることとは、正反対の事を言つて黙らせる。

「すいませんでした、最近疲れていたので少し……」

教師はたいていこう言えば折れる。

俺に親がないのを知ってるからだ。

(そんな同情いらないんだよ……めんどろだな)

そんなことを考えると吐気がする

そのあとやつと解放されて職員室を出ると、妹がいた。

「《バカ》兄貴!?　なんで職員室いるの?」

デレデレを想像した人はすいません。

こいつの名前は南　優希

名前は優しく希望のある人間に育ってほしいとつけられたみたい
です。

二つ以上の意味で真逆です。しかも、ひどく俺を嫌っていますか
ら。

「うつせくな!!　お前こそなんで　　っ!?!」

足、踏まれた!?　しかも明らかに加減がない……

「あつと!　ごめんね《糞》兄貴!　急いでるから!　また今度ね

《一生話しかけんなボオケ!!》」

(　　俺何かしたか?)

ひどい妹に足を踏まれながらも、ただ毎日が何もなく過ぎていく。

学校の帰り道、雨が降っていた。

気にせず傘もささないで歩いて帰る。

（神が出てきて、三年か……何も変わらなかったな……やっぱり自分から動かなきゃダメ……か　　）

光の柱が公園におりている！？

何か心の奥でドクドクと何かの流れを、変わるキツカケみたいなものを感じたんだ。

だから走った……なぜか自分の体かいつもよりやけに軽くて、人間の走れるスピードを遥かに超えたものをだしていたのにも気付かず。

この変化に気付かせられたのはもう少し先の話。

今はあの光が気になってそれ以外は頭にはいってこなかった。

あまり近付くと危ないかもしれないと思ったので、近くにある木に隠れながら覗き見ていた。

「な、なんなんだ！？ あれ？ よく見えないけど魔法陣みたいな物か？」

（ん？　なんで俺が魔法陣なんて知ってたんだ　　）

そんなことを考えている間に、少女が現れた。

魔方陣の中心、扉から。

それは綺麗で、顔はフードで見えなかったけど、見とれてしまっ
た……

(雨が避けてる！？ 女の子のまわりだけを……)

その時、人間ではないと確信した。

普通の人間なら誰でもそう思うだろう。

雨は少女に当たりかけると壁でもあるかのように雨が曲がる。
人間だと思っ方が不思議だろう。

魔法陣らしきものも消えていき少女が歩きだした。

心臓が爆発しそうだった……

はじめて見た魔法

はじめて見た神 (多分……)

木の陰から出て歩きだした少女の後ろ姿を見て思いだした……

「やっぱり あの時、君とあえてよかった」

そう言いながら空を見た。雲が割れて光がのぞいていた。

通り雨だったみたいだな、雨が少しずつやんできて、少年の心の
中の雨も止み。

光がさした。

(こんなにドキドキできることがまだあるなんて、思っ
てなかった)

少女は出会いを知らず。

少年は出会った。

これからの宿命も知らず……

会議室

「だけど大丈夫ですよね……あの子達、私と同じことにだけは……」
胸にかかるペンダントを掴み、その言葉を漏らす。

「ああ、そうやな……わいも、あの子の親に借りがあるさかい。なんでもしたる」

少年の写真を握り締めて、話した。

「そうね……あなた達も……過去に決着がつくのよね」

（でも……私はダメか……だけどあなた達のこと命に賭けても守るから。　　クリス……）

何か大切な『モノ』を見付けた気がします。

俺の名前は南　夏樹。

第二話 猫と首輪と少年（前書き）

だいがましになったかな……っと思っています。楽しんでもらえれば嬉しいです。

第二話 猫と首輪と少年

夕日が沈み、星が見え始める時間。

その後、警察やら調査団、あと、なんて言ってたかな？ ええと……そう！ 略して、D神デカミとか呼ばれる日本の秘密特殊機関とかに……ま、まあネーミングのセンスの話は置いてくとして、あの場所^所にいたせいで取り調べで三時間ぐらいこつてりと絞られたので……こんな時間になっちまうし……。

「あーあ……なんなんだよ！？ せつかくの気分がだいなしだな。まあ神に会えただけでも……く、くくっ ぐはっ!？」

ふくみ笑いをしていたので吹き出してしまふ。
と、言うより痛い……かなり痛い。
何かが足に噛みついている。

猫????

首輪がやたらと目につく猫。黒の体にオレンジの……蜜柑色の首輪、色のとうり前の方に小さいミカンのアクセサリーがついている。誰かに飼われてんのかな……と、考えてるより痛い!？
だが、振り払おうとすると爪でひっかいてくる……嫌な猫だ、そのあとの『一言』を聞くまでは

『……道端で笑っていると変な人みたいですから、やめた方がいいですよ?』

いきなり話しかけて……普通に人間っぽくて だけど、猫

猫は笑いながら去っていく……

ま、待て!?

今……話してた……

『なんで話しかけたの?? せっかく今まで秘密にしてきたんでしょ???.?』

えっ

首輪が……話したのか!?

もはや生き物ですらないモノが、話したことで頭がついていかず、会話の内容が分からなかった。

「ちよっ!?! 待てっ!?!」

とにかく呼び止めようとした途端に

急に強い風が吹いて、

そしたら目の前から姿を消していた。

「なんなんだよいったい!?!」

夏樹は、わけが分からず立ち尽くしていた

あれからまた少しの間、固まっていて、頭の中で……もう見なかったことにして帰ることにしたら 今度は子供が現れた。

「君がそうなのか……まあ弱くはなさそうだけど……試してみるか」

上目使いと言うか、ちっさいので上をみる形になるのは普通だった。て、言うかいきなり……しかもこう連続で……『なんなんだ』……と思いながらも、小学校低学年ぐらいの子供に目をやる。大人びたセリフを吐く子供だなと思ったと同時に

銃で撃たれた。

（ はい！？ ）

もう、声も出せずにただ反射だけで避けた……いや避けられるように撃たれただけだった。って！？ なんて避けられんだよ俺！？

「……ふう〜ん？ やっぱ『形』は違うけど、身体能力は人間のレベルじゃないね……」

銃はライフルで結構使い込んである、昔から銃は好きだったのだが、銃の種類までは分からなかった。

それだけ言うと、銃をポケットに入れた……

……なんでライフルがポケットに入るんだよ……

「まあこれからよろしくねって……まだ聞いてないか？ ん〜でもいちよう」

手を出してきて握手をしてほしいようだ。

………まあいいけど。

「うん、やっぱいい人だ。んじゃ、またねえ〜！」

「この手の感じ……いや！！ 違うぞ！？ 子供にドキドキしたなんて……うん。」

「でも、なんか昔から知ってるような感じなんだけどなのせいか？」 気

この時はまだ気付いてなかったただけだった。
いろんな意味で……

まあ銃で撃たれたがそれは……『猫と首輪』に比べれば、たいしたことはなかったので普通に歩き出した。

のだが、今度は……

「《糞が！》兄貴〜！！ 今度はいったい何したのよ！？ 《今日こそ殺す！》」

殺気に満ち溢れた妹の優希が、今にも手に持つ包丁を投げてやる
うか？

みたいな感じで迫ってきてる。

……だから、俺がなにしたんだよ……

「どうした……って、まず包丁を持って外を歩くな、マジで捕まるから！？」

「えっ！？ ……まあいいじゃん。ほら！ これで大丈夫でしょ？」

よくないから……それに気付いてなかったのかよ　　って!?

「バカ!!　包丁投げんな、　しかもそっちはあの男の子が!」

グサツ!

うわあ〜!　嫌な音したよ……あの子死んだかも……

『……………』

「　誰かいた?」

いたよバカ……この歳でもう絶望人生か〜……人殺しの兄
嫌な響だな……

「痛いですよ!?!　僕なにかしましたか?　…………この人って…………妹?」

腕に刺さった包丁を抜きながら質問してきた。
生きてた〜!?!　ほんとよかった、神様感謝します!!
じゃない!

「大丈夫かよ!?!　　じゃないよな、とにかく救急車を!?!」

「いらないよ?　これくらいなら……………」

『新たな再生の時、光命の輝きに浮かぶ者を見よ』

呪文のらしき言葉の後に、腕が光に包まれて、光が消えたときに

は傷は跡形もなく治っていた……

「ふう〜……呪文ありは、久々で疲れる……だけど、まあ君の妹さんなら許してあげても……？」

『……………』

固まっている二人にどうしてだ？ と、困っていると……

「今の何！？ 魔法！？ 魔法なんだよな！？ すげえな〜！！
なっ？」

妹をみるとまだ人を殺したかも……のことで悩んまだ意識がとんでるようだ……

「はあ〜……おい、生きてたから安心しろ」

「は！？ マジで？ ……ほんとだ……よかつた〜……じやなくて大丈夫ならどうでもいいや！（よくないよ！？）家に帰ってきてよ大変なんだって！！」

安堵したが前に言ってたことを思い出して、押されながら家に向かうことになった。

「わりい！！ なんか……ってか、絶対また会えるようにしろよ！！
魔法使いなら ……！！」

連れていかれながら叫んでるので最後の方は聞こえなかった……
少年の方の言葉も。

神様の事情

「そんなことしなくても大丈夫だよ。すぐ会えるから……」

意味ありげな言葉と一緒に少年も歩き出した

第二話 猫と首輪と少年（後書き）

長かった……そしてやっぱり物語を書くのは楽しい。

第三話 家がない!?

あれから家に帰ったのだが

家がないです・・・

なんで!?
なんで家なくなってるの!?

「なんなのこれ!?! だいたい私家にいたのよ!?! ...それがいきなりD神デカミとか呼ばれてる人達が入って来て。『少し危険なので家から出てください』とか言われたから出たら、UFOのデッかいのが飛んでて、家持ってたのよ!?! わかる!?! 頭おかしくなった訳じゃないわよ!?!」

とにかく頭がついてかない・・・その気持は痛いほど分かるぞ!

「わかった・・・とにかく家を探すぞ? あれにつて・・・何故か家のあった場所の看板に大・き・く! 持ってた場所が書いてある。かなりム力つくが・・・行ってみないと何がなんだか分かりやしないし」

そう言ってみたはいいけど・・・ほんとどうなってんだ？

「それは、いいけど・・・これ兄貴のせいじゃなかったの？」

パニック状態もだいぶましになってきたのか、普通に無理だろと思っことを聞いてきた。

「あのなあ・・・いくらなんでも予告無しに家を移動させるような友人はいないから・・・分かったらさっさと行くぞ」

予告ありならいるのが嫌なのだが・・・

あれから地図の通り歩いて・・・着いた場所は・・・

・・・学校の前の空き地。

いや、意味分かんない！？

なんで学校の前に俺の家を移動させる理由がある・・・

「
・・・
」

神様の事情

「いつもやっぱり怒ってるよ・・・と思ってたのだが。」

「やっぱり！　これで朝8時まで寝られる。・・・夢のよう」

うつとりしてる場合じゃないって・・・
まずおかしいと思え！！

「あんなあゝ　　！？」

家のドアが開いた！？

誰がいるのか！？

「はあゝい　二人とも、帰ったなら早く家に入りなさい」

なんて堂々とした奴だ人の家、動かすとして

「はあゝい　　」

神様の事情

「
.
.
.
.
.
.
」

「
.
.
.
.
.
.
」

「
.
.
.
」

「
.
.
.
」

聞いちゃいねえく……

「
ただいまあー
」

「
待てえー！……！！……！！
ちよつとは警戒しろよ！？
家動かした
」

「……………」

「……だあゝ！！ もう分かりました入ります！！ 入りますから、見つめないで下さい！！！」

「あらゝ見つめるなんてとんでもない」

前途多難だ……

…意味あつてたかな？

第四話 結婚予定!?

事実は小説より…なんとかか……………とにかくそんな言葉があるのだが、今の現状をみると小説より奇怪なことはないと思います。

現在はリビングで『みなさん』おくつろぎモード全開です。

「あらああらあ 早くこっちにいらっしやいな? ……………猫さんに子供、妹までそろってるわのに楽しそうじゃないわねえ?」

(うわあ〜この人も『変人』だよ……………この状況で楽しくできたら……………俺は普通ではないですね)

まずメンバーの紹介をしましょうか、猫さん……………と首輪。

次は

『俺を軽く扱うなあ〜!!』

『そつよ？ あんまり蜜柑ちゃんをイジメないでね？』

思わぬところで、首輪の名前が分かりました。

蜜柑だそつです……………

蜜柑色の首輪だから……………そのまんまかよ!?

ってか、まず猫さんの名前から教えて下さいよ。

(普通に聞いている自分にショックを憶えます……………)

『あら？ 妹さんから、聞いてないの？ ……まあいいわナツよ。
よろしくね』

妹????

優希とはどうゆづい関係なんですかね？

『それは……………優希が教えてくれるでしょ？』

(猫に呼び捨てに……………どんな関係なんだよ)

「え、ええ〜とね!?! それはつまり……………内緒で飼ってたの……………」

恥ずかしそうにうつ向いた……………じゃないよ!?!?

喋る猫だぞ!?!?

まず、おかしいだろうが!?!

「だって…可愛いんだもん…喋るなんてさらにプラスじゃない……………」

まあ猫好きなのは知ってたが、まさか喋る猫を普通に飼える程とは……………

「ナツ、行くっ!?!」

『はいはい、今、行きますよ』

……変だ絶対なにか間違ってる……

「因に僕はウイルね。よろしく」

ああ、ウイル君ねよろし……く……ああ!?

なんでここに君があゝ!?

「そんなに驚かなくてもいいよ」

おお、魔法少年。魔法少年だあゝ……って、まてよ……聞くけど魔法って俺でも使えるのか?

「まあ一般的には知られてないけど、基本さえ学べばね。それがどうした」

教えてください!!

「…じゃ、じゃあまずは、メンバー紹介終わるつよ!？」

「はい、終わったから早く　ッ!？」

前に座っていたルミさんにどこから出たのか、ツッコミの基本『ハリセン』でぶん殴られた。

「私の紹介しなさいよ　」

目が怒ってる、目が怒ってますよルミさん。恐いです……………

ここにいるルミさんと呼ばれている人は、第三話の家を動かした犯人でもあり。

D神の総指揮官でもある。いわゆる国のお偉いさんなのだが……………

「そうそうそれでいいのよ　」

（そうは絶対見えない……………）

見た目はスタイル抜群で髪も長い黒髪で清楚な感じなのだが……
…服装が微妙にずれた……いや……かなりずれた格好なのである。

上はTシャツ一枚で下は短パン……まあここまではいいんだが、
頭には魔法使いの帽子……あのとんがりポイントだ。

Tシャツのマークは文字で『綺麗、可愛い、美人、三点セットで
お買得』なんて文字がプリントされていた。

あなたは結婚したくないみたいですね……してたら夫は可哀想で
す。

「……もうそろそろいいかしら？ 本題に入らしてもらいたいんだ
けど？」

「はっ、はい！」

急に真剣な顔付きになり、空気を少し重くしてルミさんは語りだ
す。

「私達がここに家を移動したのには訳があつてね……」

（そりゃ訳なきや困りますよ……）

「あなたと『結婚』する、予定の神様がもうすぐこの家に来るのよ……」

一瞬、固まり『二人』は驚きを声にする。

『ええ〜!!!?』

「……って、何で優希まで驚くんだよ!？」

「いや、もの好きもいたもんだな〜と思って……」

「そうですね〜…かなりムカつくけど今は無視しといてやる……
…で、その結婚とか予定とかワケわかんないんだけど!？」

眉間のシワをピクピクさせながらも、ワケがわからない結婚に関してを問いたです。

「そりゃそうでしょ…まあ神界でも極秘で決めたことみたいだしねえ」

つと、この人には人事なので軽い顔で煙草を吸い始めたその時…
……やって来た………

「とにかく…今こっちに、………つて来たみたいね？」

ルミさんはそのあと耳を塞いだ。

「は??? 何がなんだか、まだ分かんないんだけど ツ!？」

玄関の方から鼓膜が破れるかと思うような爆音がして耳に急いで手を当てたら。

他のみんなは平然とした顔で耳を塞いでた………

(なんで音する前から耳、塞いでんだよお前ら………)

つと愚痴りながらもとにかく玄関に向かって走った。

(ルミさんがいるからテロか!？ 爆弾テロなのか!？ ここには

それ以外狙うもんなんてないぞ！？)

そんなことを考えてる間に玄関についた。

煙でなにも見えない。

煙が晴れたとき見たのは、あの雨の公園で見た女の子だった。

第四話 結婚予定！？（後書き）

どうだったでしょうか？楽しんでもらえたのなら、幸いです。これからも日々努力を重ねて進歩していきたいと思えます。

第五話 破壊神降臨

またまた先程入ってきた、『珍』入者により部屋は………またいちだんと…明るくなりました。

…泣いていいですか？

公園で会った少女（神様）も今は………

「なあにそれえ〜！！
ッ！…あはははひいひ〜し、しぬ、
笑い過ぎて死ん、し！？」

何ですかあれは？

見た目と違うにも程があります………

俺の初恋っばいの返してください………

少女は金色の髪をウェーブにした感じで、目は綺麗なエメラルド色でもう片方はルビー色。

見た目はすごく綺麗でまあある意味で、ルミさんとかぶるところはたたある。

それに服装は……何故か！

『現在』家の前にある学校の制服だったりします……

なんですか！？

「そりゃこれから、通うからよ」

やれやれ……といった顔で首を降った。

「そ、そうだよな……」

(この人？『神様』は怒らせちゃまずい……)

何故かと言うと『破壊神』らしい……本人が言うには……まあ実際、玄関吹き飛ばして入ってきた訳だから分からないこともないんだけど……

神様の事情

「とにかくう　　神様　　？　　自己紹介がてら名前を教えてくださいな
いかしら　　？」

ルミさんのテンションが異様に高いのが気になったが元々、変人だから気にしてたら身がもたないだろうなと思って、無視していた。

「えっ？私の名前？クリスよ。それよりこの猫や子供この女の子は私の結婚、相手のなんなの？」

結婚、そう結婚だよ……………

思い出したように神様…………いや、クリスに聞いてみる。

「あ〜なんで」

「妹!!!」

神様の事情

『ベッーね』

『く』

「居候？」

「これから帰る！……！」

「待てえー！！！！ 違う、妹以外認めた覚え……な ……！？」

「なんでこんな急に眠気が………首に針？ なんだよこれ………まさかウイル？ ……が ……」

………バタツ ……

「ええ〜と？ どうしたの？ 『いね』」

ぶっ倒れた夏樹を指差しながら、聞いてみる。

「『これ』はまずいんじゃない？ 未来の、旦那でしょ」

思わず聞き返してしまふ。

「……………マジで!？」

優希が面倒そうにそれに答える。

「まあ、ムカつくけど家の兄貴はこいつだけ」

手に抱かれてたナツは何かを知ってる風に語り出す。

『まあ大変だろうけど頑張りなさい…お互い〔過去〕すごいんだからね?』

『……………むう……………』

どうもさっきの扱いが気に入らない蜜柑と、猫の『何かを知ってる』感じが気に入らないクリスは嫌な態度をする。

「……………嫌な猫……………」

「まあまあそう言わないでね？」

「じゃっ!! 帰るわ」

そそくさと荷物をまとめて出て行ってしまったルミをいちよう見送りに優希とウィルは向かう。

まあ優希に抱かれているから着いて行くしかないナツも勿論、一緒である。

部屋が静まりかえって、なぜか取り残されたクリスと、麻酔銃で

眠らされたらろう夏樹。

二人しかいない……………

(こいつがねえ……………まあ悪くわないかな?……………似たような過去ねこいつも…それにしても可愛い寝顔……………ッ!?!?!?)

顔を目の前まで近付けていたために、寝相が実は悪い夏樹の手に捕まり、抱きかかえられる感じになって…顔が、顔が、後、数センチで…というところまで近付いた時、勿論お約束の

「!?!?!?」

『早いわねえ?』

「若いなあ〜!」

神様の事情

登場だ

「え、えっ!?! 違う、違う………誤解しないでよ」

と、言いながら……お約束のパターンを完全に『破壊』した新しいパターンできた……

「?????」

『!!!!!!?』

ナツとウィルは危険を察知したように優希を連れて家の外に飛び出した。

と、その後はさっきまでいた廊下は大爆発
優希は当たり前のように叫んでしまう………

「こ、殺す気かあゝ!?!」

その時、中で何があったかは分からないが……
家を修理しなくてはならないのは確かだ。

その後、また起きた夏樹を面倒なので、また麻酔銃で眠らせて、みんな眠りについた……

その夜……

何か黒い陰が南家の（南は夏樹と優希の上の名前である）周りを
見て……

神様の事情

「あのバカ、到着早々これってどうゆうことよ……まあいいわ……」

その声は女のもので、何か諦めたように、腕を地面に当てて魔法陣を描いていく。

するとクリスが吹っ飛ばした廊下、玄関が元通りに戻っていき、最初と変わらない南家の姿に戻った。

「これで、よしっと！ 本気でこの家に住ませてもらえるよう、おじさんに頼まないと可愛そうよねこの家族……………」

そう、ため息をついていると後ろから低くて重い声がした。

『はははっ！！ まあそれはいいが……………約束は守れよっ？』

威厳の様なモノを感じさせる声に、空気が少し重くなる……………女は渋々ながらも返事をして聞きたいことを聞いてみる。

「……………分かってます。それよりおじさん……………何でここに？」

『伏線じゃよ伏線』

第五話 破壊神降臨 (後書き)

今回はヒロイン登場です。これからも、謎が謎呼ぶ！ミステリーを・
・じゃなくファンタジーを・・でもなくコメディを、んゝ・
・ファンタジーなんだけどこれで大丈夫なのかな？

第六話 少女と雨……

「傷、だらけのこの羽　　なくして飛んだら死んじゃったー」

「ダークな歌詞を楽しそうに歌わないで下さい……………」

「しかもかなりうまいのが、気になるんですけど……………」

「はぁ……………お前なー、もう少し静かに出きないか？」

「今はバスの中です。」

「何故か二人で夕飯の買い出しに行くことになりました。」

「朝の『訪問者』をきっかけにして……………」

「まずは朝、家が元通りに戻っていたことから始まります。」

「・・・なんで元通りに戻ってんの!？」

人間として欠けてはいけない、常識が今は欠片もありません…………

「ん？ たぶん『ルナ姉』が元に戻しに来てくれたんでしょ？ 別にびっくりする程の事でもないしー。それより朝食まだあゝ？」

昨日の爆発事件の張本人は何事もなかったかのような態度でソファに座ると、テレビをつけて普通にくつろぎ始めています。

いちよう寝起きはいいようで『ダーリン 紅茶いれてよ』などどほざいています。

俺の中の『これ』に対する殺意が1レベルアップをしました。

それにまた新しい名前が出ましたよ？ しかも姉？ どんな怪物なのですか？

そんなことを考えていると超のつく程、寝起きが悪い優希がナツを抱えてやってきました。

「……………昨日は『これ』に殺されかけたのよね……………」

『まあ無事なんだからいいじゃない、ねっ？』

『ぐう……………』

猫が人間をなだめている光景と首輪が寝ているとゆう事実を朝から見ていると、常識の文字すら見えなくなってきました……………

そこへ……………昨日は俺を麻醉銃で俺を眠らせて『居候』と名乗った少年がやってきて親父みたいな事を口にして玄関に向かいます。

「ちよつとジョギングしてくるね……………あつ！ 朝御飯はパンがいかなあ」

……………へえ……………！ みんな家の家庭にそんなに馴染んじゃってるけど、昨日、会ったばかりだよ？

これって考えた方が敗けなのかな？

とか、現実逃避をしたくなる中で……………

《ピンポーン》

こんな時セールスや新聞の勧誘だったら・・・ふふ。

ダークなことを口に出さないようにしながら玄関に向かうと、ウイルがもう話していた。

玄関に立っていたのは綺麗な格好をしてピンクの長い髪がすごく綺麗に映る女の人だった。

「あら！？ もう子供できたの？ 早いわねえ」

……………かなりの天然ですね…ってか、天然で許される限界を越えた失言ですよ？

ウイルは、きよとん…とした顔をしたが、すぐに否定の言葉を…

……………

「そっなんです」

口…しるやあ…!!…!!…!!?

『あらあら』とか言っている、お姉さんはポケの才能をもっているようだ。それを間に受けて……

「そうなんですかあゝ　親は優しいですか？」

「……………父親は優しいんですけど……………母親は、僕を《爆殺》しようとして昨日……………うう……………ぐすっ……………」

「じ、ごめんなさい！！？　そうとは知らないで！！？　『妹』はきつちりお説教しておきますから！！　泣かないで、ねっ？」

「何この展開は！？　意味分かんないし、三流の茶番劇だ……………んっ！？」

「今、あの人『妹』って言わなかったか！？」

「……………妹？」

「はい！！　私はクリスの姉のルナ・M・フォンドムと言います」

ええー！？ いきなりキャラ出しすぎだつて！！！？

まあこの後、お昼すぎまでは、ルナさんに色々と説明をしていて、気が付いたら夕方になっちゃってたから、俺とクリスが夕飯の買い出しに……何故行かなきゃダメなんだ！？

まず、コイツじゃなくていいだろうが！？

「ふふうくん いいけど、静か」このバスの乗ってる人達皆殺し、
つてことになるけど 「

「そのまま置いて下さい」

恐ろしいことを口にされたのもう、無視することにした。
それから買い物『無事』にすませた帰り道。

雨が降り出しそうな天気になった……通り雨かな？

クリス

「……………」

バスで帰っている間は何故か、クリスはおとなしくなっていた…

……

(コレくらいなら、可愛いけどな……………そう言えば、あの時もこんな感じだったっけ……………?)

公園で初めてクリスを見たときのことを思い出していた。

バスを降りてすぐに雨が降り出してしまった。仕方なくバス停で雨がやむのを待つことにしようとしたら…

「んあ!?!」

変な声が出てしまった……………いきなりクリスが腕を掴んできたからだ。

どうしたんだと思っていると……………

震えてる……………！？ クリスの手は震えながら俺の手を掴んでい
た……………

（雨がダメなのか……………？ そう言えば『あの日』も雨だっ
たっけ……………）

夏樹

「ッ……！！？ （やっぱり…『あの子』を思いだそうとすると頭が
いてえー……………）」

その様子を見たのかみてないのか分からない、自分のせいかな？
とか考えてくれてたなら嬉しいが、離れようとしたので……………抱き
しめてやった。

「……！！？」

「わりいわりい。大丈夫だから……………なっ？」

まあやっぱり聞いているのかは分からないが、今度はしっかりと、
しがみついてきた。

「……………ったく…雨が怖いなら言えっつうの……………」

それから数分後に傘を持って迎えに来たルナ、ウィルに見られて、
若いとかぶつぶつ言われたのを憶えてる。

第六話 少女と雨……（後書き）

今回はクリスがよくできてきましたね？ほんとはスゴくい子なんですよ？嫌わないであげてくださいねって感じで書きました。

第七話 クリスと料理！？

その夜……………

ルナさんに夕食を振る舞うことになりました……………

「っで？ 誰がつくるの？ 僕はパスだよ」

「私の料理なんか……………」

…………… お前は料理なんてしちゃダメだ
あの味はトラウマになる…………… そのせいで俺は好きだったカレー
を食べえなくなっただから……………

『私は無理よ？』

誰も猫に夕食を作ってくれなんて頼まないよ……………

『……………俺が作るっか？』

うんうん、首輪がね…………… 首輪が料理なんてするかあゝ！！
ってかするなよオラァ！！

「仕方ないかあ〜……………私が作ったげるよ」

はい……………？

あなたは今、料理を作ると言いましたか？

死体を作るじゃなく、爆薬を作るとかでもなくて、料理……………？

「その、いかにも料理なんてキャラじゃないだろ的な目でみんな見てるよね・・・殺していい？」

「マジでクリスが作ってくれるの？……………ほら！！ 何してんのあんた達、早くキッチンから出なさい！！」

突然、驚きの声と、怒鳴り声をだしてキッチンに飛込んできた来客が、俺達をキッチンから追い出すと……………なにか言っ出てきましたか……………限りなく不安です。

それから数分後……………

爆発も、何か壊れる音もしないキッチンを気にしながらも、俺はルナさんの様子が変わっていることに違和感があったので聞いてみ

た。

「えっ？ ああ、こっちは結構親しい人じゃないと見せないことにしてるのよ…天然の方がよかったかしらあ？」

「いえ……………普通にしてください」

なんてコントをやっていると……………

「ふう〜…食材が少し微妙だから時間かかっちゃたか……………まあ出来たし運んでウィル、優希」

「あ、あんたは、な ……！！」

「まあまあ！？ 落ち着いて！？ せっかく作ってくれたみたいだし早く持ってこないと冷めちゃうから……………」

ウィルがなんとか優希をなだめて、キッチンに連れていった……………すると優希の怒りの声が聞こえなくなりウィルと優希が目点を点に

しながら、料理を持って戻ってきた……

テーブルの上に並んだ料理は……

「…………マジで!? これお前が作ったのか!?!」

「? ……………そだよ? 何かおかし」

「早く食べたいんだけど……………いい?」

ルナさんは待ちきれないようなのでみんな机に座り食べ始める。

(うまつ!?!? 美味すぎ!?!? 何これ!?!? こりゃ〜ルナさんが早く食べたいつて言うはずだよ)

みんな無言で料理を食べている……………そりゃびっくりするよな。

「ねえ? 美味しい? 少し調味料の数が少なかったから簡単な味しかだせなかったんだよね」

「もしかして、これでマジに料理してないのか?」

『うん』と頷く。……………マジですか!?!? だけどクリスマスに料理の

才能があつたとはな……

『楽しい時間を過ごさしてもらいました、今度は許可をもらってここに引越してきますから』最後は礼儀正しく……最後の言葉が気になったが……とにかく今日は疲れた。

「料理で疲れたし、寝る……」

ほんとに寝たよ……!?

ああ、自由に生きすぎだ……とは思うが今日は許してやるか。

第八話 夏樹と彼女

いきなりだけど、結婚に関してまだ何も聞いてないし、俺も承諾した覚えはないんだけど……

「今更何言ってるの？ 私が妻なのがそんなに嫌なの……？」

はい！！ 泣こうがわめこうが完全に拒否します。それに明日は学校の補習、行かないとさすがにマズイから……お前達とのコントは今日は無しね？

クリス

「ムカつく発言だけど今は無視してあげる。大丈夫 私も学校行くから、コントはできるよ？」

神様……私はあなたを憎みますね？

学校に行く途中に……今、会つには最悪の人物と遭遇してしまう……

「……あれね？ その人は誰なのかな夏くん？ ……言
い訳が無い！ 私の考えは当たってる??？」

顔が怖いよ昂……

夜の 昂俺の幼なじみで……彼女だ……いちよう。

「ダーリン？ このカス女誰？」

……………断言してやるお前は人を怒らせる才能がある！

……………泣きたいよ。

「ふう〜ん ……………その幼稚園児みたいな体型で、おこちゃまなガキに振り回されてんだ？ 浮気者？」

かなり目を細めて肩まである赤茶の髪を揺らしながらクリスに……………と俺にケンカを売る。

「……………言っちゃったねえ〜 禁止用語、言っちゃったねえ〜

コ・ロ・ス ……！！」

「殺れるもんなら殺ってみなさいよ！！」

……………簡単に、買っちゃう破壊神クリスと完全にキレた昴の戦い……………俺には止められないなあ……………

それを突然現れた光が二人の動きを止めた。

「ッ！？ ……これって？ 今度は『ルキ』なの？？？ もう……………ホ

ントに夏休みが、終わるからって一気にキャラだすつつまんないよ？」

誰に言っただよクリス……

突然、空中に穴ができて、その中から今風のファッションに身を包んだ可愛い高校生ぐらいの女の子が出てきた。指の綺麗な指輪が虹色の光を帯びて、髪は金色で美しさまでかねそなえてる女の子だ。

「そつだよね……私も言ったのに……。でも、最初にも出れたし……まあ私が来たのは色々と事情はあるけどって？　この子が？」

「そつ！　私のダーリン」

「勝手に奪うなあ〜!!」

「……………ごめんなさいね？　面倒だからあなたの記憶を少し奪わせてもらいます……………」

神様の事情

「ちょ、ちょっと待ってよ!?　いちよう俺の彼女だ、いきなり現れて勝手に変なことしないでくれないか!？」

「へえ〜…結構愛されてんだ？」

「夏くん……………いちよつってどつゆつじよ？」

「ふん……………いいきみじゃぬえか。バカみたいに女を周りに連れやがって……………この人殺し！！」

「だからキャラだし」

こいつは火咲ひなみ 拓矢たくやコイツも俺の幼なじみで……………髪は赤、ツンツンでモテるが……………自分で言うのもなんだが俺より下だ。
俺の事を人殺しと呼ぶのには訳があるが今はどうでもいい……………

「……………昂……………」

「…………………………」

この二人は昔付き合っていた……………その時、俺と付き合う為にコイツと別れたんだが……………理由がある・・・俺と昂の秘密だが。

「勝手に盛り上がらないですよ……………私達バカみたいじゃない」

「達は余計だつてクリス……私バカじゃないよ」

クリス達も話題に入ろうとしたがさすがに無理のようだ……俺はただコイツには謝るしか出来ない。

「ごめん……」

「……あゝあ、ウザいのに会ったから補習行く気、失せたよ……」

拓矢は鼻を軽くみたあと帰っていった……

ルキも『また次でてくるまで結構、時間あるんだよね……』
なんて文句を言いながら去っていった。

だからあなた達はなんなんですか……自由に限度がありますよ……

第九話 昴の気持ち

(昴にバレてしまった……………)

あの何故か人が大量に出てきた学校に行くための通学路から、今は説明すると言う理由で近くの喫茶店に来ている。

「で、夏くんはどうしたいの？ 私のことはもういらなくていい？」

少し顔をひきつらせながらも、俺にたずねてくる。
(わるいな、昴……………俺も大変なんだよ)と心の中で謝りながら。

「い、いや！！俺はまだ結婚する気はない、それにクリスとは……………2日前に会った……………ばかり……………お前ら2日で俺の常識を壊したのかよ……………」

たった2日の出来事が、一ヶ月以上に感じられる状況……………自分がおかれている事実嫌気がさしてきて落胆する夏樹だった。

神様の事情

「そうじゃないでしょ！？ 私が聞いているのは、あなたが『どっちを選ぶのか』ってことよ」

「だから、それはどうせ、形だけの付き合ってるのかなんだからさ？ 拓矢も、お前からは離せたわけだし？」

夏樹は少し焦りながら昴に返答を返すと、昴の体が震えたような気がした……………

「そ、そうよね！ 言われなくても、分かってるわよそんなこと……………」

夏樹の言葉に昴は、少しだけ…ホントに少しだけ、昴は…泣きそうな顔をしていた。

それは昴も最初はそのつもりだった……………だけど夏樹の優しさ、強さ、それに、たまに見せる消えそうな顔……………それを見せてくれた夏樹を好きになっていた。

でも自分を隠すためにクリスにあたっている……………

(嫌な女よね……………私が好きだって、ホントに好きだって言えばいいんだろうけど……………)

それで今の関係が壊れるのを恐れてる…『嘘の関係』それがホントにならないことを知っている。だから今の状態を保っていたいと願う……………続かなくても。

「とにかく！！この状態は続けてくれないと拓矢が優希ちゃん
の存在に気付くまで」

「ねえ？よく分かんないけど………とりあえず、優希とさっきの
拓矢だっけ？付き合えば、別れるんだよね？」

クリスは何か考えがあるのか、自信ありげに二人に話す。

「まあこれでも神様だからね。いろんな神様に友達いるんだよ」

料理の件以降、夏樹もなぜかクリスの信用がアップしていて、今
回は、まかせてみることにした。

昴

「……………」

次の日の朝

クリスがマイクを片手にしながら、設置されたカメラの前に立つ。

「おはようございます！現在午前四時です。TVの前の子供達！
早く寝ろお〜！！今からドッキリ企画『優希は誰が好きなんで
しょう！』のコーナーが始まり イタツ！？何すんのさ〜せつ
かく寝起きの悪い優希だから、寝起きに聞けばポロツと本音を喋る
かな？とか考えた企画を ツ！？」

「それはいいが、この人数で行けば間違いなくバレる……………」

そう言っていると夏樹の後ろから続々と人が出てくる。

ウィルは玄関の靴箱から、ナツは階段下の物置から、昴は玄関から入ってくる。

『だって気になるじゃん』

『気になるわよね』

『えっ！？ う、うん気になるから』

無視していいよ昴……………」

「大丈夫だ！ 今回は友達に『無料』で貸してもらった夢尋問機がある！！」

説明しよう、夢尋問機とは他人の夢を勝手に見れるつえに内容を好きなように変えられるのである。

実際は神様の便利屋業界に著作権とかで、日本円にして十万ぐらい必要なのだ。

「へえ、すごいこの借りてきたね？」

『楽しそうね。ワクワクしてくるわー』

話しているとターゲットの部屋のドアが開き、中から鬼の顔を
した優希が現れる

「……………へえ〜!! 楽しそうなことやってるわねえ〜!! 人の
部屋の前で」

バタツ……………

「ど、どうした!?! ウィルか……………」

ウィルを見ると普通に麻醉銃を撃っていた。

「これでOKだよ」

「ナイスッ!!」

二人が悪魔に見えてきた……………
そこに昴もはいり夢尋問機を優希に装着していく。

『さ〜て優希の好きな人は誰なのかな?』

そういいながらナツは夢尋問機のスイッチを押した。

ジジ、ジ、ジジジ

映った!!

画面に映ったのは学校の屋上、そこに優希ともう一人男が立っていた。

男の方は顔が見えない……………

「つたく!! さつさと顔見せな ツ!？」

「始まるみたいだから黙れって」

「……………私が好きだって知ってるでしょ!? なんでいつもこっちを向いてくれないの……………」

「お前が、好きなヤツは今の俺じゃない……………俺はまだアイツが許せないんだ……………俺から全てを奪ったアイツが……………」

「私はアイツじゃない!! 私は、私はあなたが今のままじゃ必ず何か悪いことが起きると思ったから……………」

神様の事情

「アイツが心配なのか? 大丈夫だよ、お前を悲しませたくないか

らな。これ以上アイツには関わらない……………」

『拓矢……………』

「拓矢！？……………マジかよ」

驚きと同時に嫌な予感もしてしまう。

「……………うん、ホントだよ。夢尋問機には好きな人との最近の事を教えろって打ち込んだから……………」

クリスは少し言いにくそうだったが事実を……………現状を教えてください

「夏樹が……………夏樹のせいでこの二人は進展ゼロなんだよね。ねえ夏樹……………いたい拓矢とか言うのと何があったの！？」

答えにくい質問に、少し嫌な顔をしたが……………

「ウィル、俺に麻酔銃撃て……………そっちのがわかりやすいだろ？」

「ちょっと待って！！ いいの！？ 教えて後悔しない！？」

撃とうとしてるウイルスを止めて、夏樹に聞く昴は悲しさと、自分にだけ教えてくれたのに、と言う悔しさが混じった声だった……
ただそれは夏樹には伝わらない……

「いいんだよ……いつかこんなに側にいるんだ……知られるだろうから」

そう言つとクリスにその時の事が見れるようにキーワードを言つと、麻酔で眠りにつく。

『なんだか、悲しいわね……夏樹くんの過去になにかあるのか……一人で抱えて今まで生きてきたなんて……』

ナツの表情は暗く首の蜜柑もあまり何も言わなかった……
夏樹に夢尋問機がつけられてクリスがキーワードをいれる。

「いくよ?」

『助けられた人達』

それが悲しい思い出でも……頭の中に残る記憶。

第十話 記憶の形

『助けられた人達』

俺は何度も人に助けられながら生きていた……自分のかわりに誰かがいつも死ぬ……それが辛く、悲しくて誰とも話さないようにしていた。

そんな時、火咲拓矢と出会ってしまった……

最初は小学生のころ……拓矢の姉が俺を工事現場で落ちてきた鉄骨から守ってくれて……死んだ。

『酷い……こんな光景をまだ小学生で見たなんて……』

「……………」

それから病院で俺の見舞いに来てくれた……泣いてずっと謝って、拓矢の母親が俺を泣きやませてくれた……初めて人に抱き締められて、とても温かくて嬉しかったな……

それから一年なにもなく過ごせたのに……中学生になった年のクリスマス……また事件が起きた……

拓矢の母、緋音さんは優しく綺麗な人だった。

それにみんなから好かれるし、世話好きでもあったから俺も親がないので面倒を拓矢よりよくみてくれたと思う……

『今日はごめんね？ あの子に少し寂しい思いさせすぎたみたいなの……………親失格ね……………』

今日は少し落ち込み気味の緋音さんに、いい情報をあげることにした。

「ホントに！？ 夏樹くんありがとー！！ 拓矢の好きなモノ選ぶのいつも大変なのよ。それが欲しいならそれを買ってあげないとね」

やっぱり元気な緋音さんを見るとこっちまで元気になる。

拓矢の欲しい物、昴に聞いてよかったなど、思った。夏樹も最近拓矢と仲が悪くなりかけていたので、今は一緒に拓矢のプレゼントを買いに街に来ていた。

横断歩道が青になったので夏樹は渡ろうとすると

「あぶない！！！？ ツ！？」

赤信号なのに車が突っ込んできたのを見た緋音さんが俺を後ろにおもいつきり引つ張ったのである。勢いで少し体を地面に打ったが緋音さんは無事だったのでホッとした……………

だけどこの時、引き返せばよかったと、あとで後悔することになる……………

「ったく！！ こっちは死にかけたのに止まりもしないで、夏樹くん大丈夫だった？」

大丈夫だと言うと安心したように笑って、目的の場所に向かい、
買い物ですませた。

その帰り道。

今年は雪がよく降っていて、いたるところに雪の高く積まれた場所があった、今も雪が降っていて緋音さんは嬉しそうだった。

「ねえ！？ やっぱり驚くかな拓矢？ 楽しみね〜……………？」

その時、緋音さんは何かを見付けたように路地を曲がり走っていた。
った。

何かあるのかと思って俺も曲がりかけたら……………

何かが爆発した。

その後のとんでもない爆風によって、俺は2mぐらい吹っ飛ばされたが、雪の積まれた場所に落ちたためいちよう息はあった……………

その時は爆音で耳が何も聞こえない状態で、肋骨が折れていたり
右手も変な方向に曲がっていた、が緋音さんを探す。

俺は……………また大切にしていた人を失うのか！？

それが痛みを感じなくしてくれたから緋音さんを探し歩く。

「……ただ、そこに『あった』のは人の形はほとんど残っていない『モノ』……と、二人で買った拓矢へのプレゼント……」

「……さすがに、これは頭がおかしくなるかもね……」

「うう……!?!?!?」

昂は洗面所に走っていく……

「……………」

病院に連れていかれた俺は、雪を見ると精神的に不安定になる状態で入院……そこには誰も見舞いに来ることはなかった……

人は一人では生きていけない……

だけど俺は一人で生きるか、死ぬかの二択しかない。

じゃあ、俺は一人では生きてはいけないから死ぬ。

それが自分の罪から逃れる最後の手段。

そう思ってた……

第十一話 クリスの過去

その夜、クリスが真剣な顔で俺の部屋に入って来た。

「なんだよ、こんな時間に……………あれから一言もみんな話さないから」

「そんなこと、今はどうでもいいの……………コイツに見覚えある？」

夏樹の言葉を遮ってクリスが出したのは一つの写真。夏樹は分からないと言つとクリスが自分の過去を少し話し始めた。

「私の家は代々、創造の神として有名だった……………」

「えっ？ クリスって確か……………」

「うん……………私は破壊の神……………まあ最悪の状況だよな？ 私はその時、殺されるはずだったんだけど……………」

目を閉じて、また何かを隠しながら話を進める……………

「別によいではないか……肩書きなどにこだわって、自分の子供を殺すなど私は反対だよ」

「そうよー！ この子は私の子供、誰にも殺させないわー！」

そのお陰で私は今生きている。

だけど……一番、お礼を言わなきゃいけない人達は……もう

……

私が11歳になったある日……神界の四勢力の一つ【凶月の女神】による抗争の中で、殺されたの。

私の親は四勢力の一つ【創翼の女神】のリーダー。

そんな簡単に殺されるはずないと信じて、色々調べたの……
そしたら……何処ですり替えられたのかわからない資料の山。

【凶月の女神】との抗争自体が嘘だったの……

それを知った私をまた殺そうとする人達からかくまってもらって理由と、夏樹と結婚するためにここに来たってこと。

「まあそのせいでかなり普段は性格がねじまがっちゃったけどね」

笑いながらそう言つと……

「その写真のヤツ……………夏樹は知ってるはずだよ？ ……まあ自分で気付かなきゃ意味ないしね……………でも、いちようヒントはあげるね」

『大事な物、場所、人、気持ち、それは何か一つの繋がりがある』

「は????」

訳がわからず聞き返す。

「それだけ……………いつか思い出せるよ、夏樹が心に残ってる記憶をたどればね……………」

クリスはそれだけ言つと部屋を出た。

夏樹は写真を見てもやっぱり思い当たる人物はいない……………ヒントも解らない。

「仕方ね……………寝るか」

夏樹の部屋の電気が消える……………

月明かりが、外にある白い影を夏樹の部屋のカーテンに映したが、

神様の事情

それに気付かずに夏樹は眠りにつく。

深い眠り……まるで死んだように……

第十二話 夢・モフモフ？

夢を見た

夕方、公園に見たことのない中学生ぐらいの女の子が一人立っている。

太陽が沈んでいく、すると女の子の周りも暗くなって…木、川、光、すべてなくなっていく……

女の子はそれでも真っ直ぐ前を見て立っている。

誰かを待っているのか……何か見ているのか……女の子はただ前を向いているだけ……

すると突然、女の子の後ろに化け物が現れた。

化け物は口が大きく、目は無くて、羽があつて、手には黒い大きな玉、何かのエネルギーの塊のようなものに見える。……明らか

に女の子を殺そうとしている。

……その時、俺は女の子に向かって走っていた。

殺させない！！ 絶対殺させない！！ もう誰も…俺の前で死なせたくない！！

神様の事情

……その時、なぜか知らないはずの女の子の名前を呼んでいた

気がした。

『……………』

「ツ……!!? はっ……は……は……? ゆ、夢か……」

なんだっ たんだ今の……

あの子……誰なんだよ……

ツ……!!? 頭イテエ……

考えるのが面倒だから起きることにした夏樹が部屋を出ようとす
ると……

モフッ……

目の前に白い『モフモフ』した壁があった。

「……………なんだこれ？」

突然現れた『モフモフ』にびっくりしながらも……………『モフモフ』

感がもう少し触りたくなってもう一度触ってみる。

モフモフ……………モフモフ……………モフモフモフモフ。

(た、楽しい……………)

『モフモフ』に軽くはまってしまった夏樹は十数分ぐらい『モフモフ』を楽しんだ後、冷静に考えて……………

「んっ？……………部屋から出られないな……………オラァ〜！！ クリス！！ さっさとこの『モフモフ』どける！！」

『ええ〜』と言いながらクリスがやって来て『モフモフ』をどけた。

夏樹は『モフモフ』の正体には一切触れずに一階へおりてしまったため、『モフモフ』はクリスに捨てられたみたいだ。

ちょっと気になるが……………

「せっかく新たな『話題』を持ち込んであげたのに、無視はひどいよ〜」

「そうか？ お前の持ち込むのは『問題』だけ、だと思ってたよ」

「あれねえ？ そんなこと言っちゃっていいのかな？ ……今日の朝食は『ダーリンの丸焼き』とかがいい？」

朝からグロテスクな物を、想像させないでくれ……………

「いや、やめといてくれ。しかも、『俺の丸焼き』をどうやってたら俺が食えるんだよ……………まあ俺が悪かったから、だから普通の朝飯がいいかな」

『それもそうだね』『なんて言いながらキッチンに向かうクリスマス。最近、朝は俺とクリスマスだけなのでクリスマスがいつも朝飯を作っている。』

(これじゃあホントに夫婦じゃねえか……………)

そう考えているといつもどおり、料理が数分で終わる……………どんな作り方してんだよ……………まあクリスマスが料理を持ってきてくれる。

平和な食卓……………が……………

そこに現れた人物がすべてぶち壊す。

「あれから、なにしてたのかな？ あの後、変な夢見たんだけどア
ンタ達何かした？」

ウィルが麻醉銃で眠らせた怪物が今、起きてきてしまった…………

と、とにかくバレないように

「優希の好きな人って拓矢とか言うヤツなんだね。なかなか面白か
ったよ！！」

言うんじゃねえ〜！！！？

親指を立てて『最高だったよ』なんて言ってるし…………

「ほおう！！ お前らそんなに死にたいか！？ ならお望み」

優希の怒りが止まった……………何でだ???

軍隊でも止まらないだろう優希の怒りを

クリスが持っていた画面に映っていたのは優希の恥ずかしい告白
シーン…………

「にゃははは！… これは何回見ても楽しいね？」

チラツと横目で優希に瞬間のアイコンタクト。

（これ、壊せば無くなるなんて思ってないよね？ あまいあまい、まだ他にもいろいろダビングしておいたから……あつ優希？ お茶取ってきて）

「……………」

優希はもう固まるしかないが、お茶を取りに向かう。

悪魔の降臨だ……………

「えっ！… 食べよう夏樹」

君は敵に回したくないねクリス……………

南家の前

ウィルが朝のジョギングから帰ってきて家の前に立ち鍵をポケットからだそうとしていると……

「すみません？　ここは夏樹くんのお宅ですかね？」

優しそうな顔をしたスーツ姿のおじさんが立っていた。

「そうですけど…？」

ウィルが答えると男はウィルに

「んっ？　君、もしかしてだが　か？　なんなんだその『姿』は
？」

「えっ。まさか先生！？」

「おお、やっぱりそうか長い間見なければ変わると思ったが…まさ
か　」

神様の事情

「しっ！！　まだそれは秘密ですからあまり話さないで下さいね？」

「聞耳たててる『ヤツ』もいますから……………」

「おっと、それは失礼……………ところで夏樹くんはいるのかな？」

「

また新たに一つラインが出来た……………それを正しい道で通れば過去の扉が開く。誰もまだ知らない真実も分かるだろう……………」

第十三話 真実との繋がり（前書き）

今、出ている小説を全て修正しました。少し修正している話や、かなり修正に書き足した作品まで、とにかく普通の小説目指してがんばります。

第十三話 真実との繋がり

前回登場した先生……………

名前は……………なんだっけ？

……………と、とにかく先生とみんなが呼ぶので先生なんだよな。

「 …… つで先生、今日はなにか？」

「そうですね……………気付いてないなら許してあげましょうか……………
あなた一度も補習授業来てないですよね？」

固まる夏樹。

「……………す、すみません……………これには深いわけがですね
…って何でウィルやクリス、ナツに優希までいるんだよ!？」

勢いでつつこんでみると……………

「そりゃ先生と知り合いだから」

神様の事情

『優希が私を抱いてるからね』

「さっきの仕返し……………」

「楽しそうだし!！」

一人やっぱり落ち込んでるか……………じゃなくて。

「出てけオラァ〜!! ……………っで先生どうしたらいいでしょうかね?」

「そうですね……………この状況ですから……………まあ私がなんとかしておきますから。今はあの方達と遊んであげてください」

笑顔で言われたのでなんとなくくすくすする? 夏樹。

「はい、そうして……………っていいんですか!? 補習大丈夫なんですか!? 別に今からならあんなのほっというて補習行きますよ!」

先生ももう少しであの非日常的な存在から離れられるんです!? 確かに魔法は使いたいですけど結婚相手はまだいません!!

だから、補習に出ると言ってくれただけ

「大丈夫ですよ。クリスさんとは仲良くしてあげなさいね」

ああ〜……………普段は優しい先生が、今は悪魔に見えます。

これで夏休み中に拓矢の件を、解決しなきゃならなくなつたよ……
もう疲れました。

「……………」

っで先生が帰ってしまったのでどうするか……………

「拓矢くんにはまずは、優希ちゃんと仲良くしてもらわないとね」

どっから出てきたんだよ昂……………

(……………ちょっといいかな、夏樹?)

廊下の扉の向こうからクリスがアイコンタクトしてくるので、行

かなきゃ俺死ぬんだろうなと思ひ、仕方なく廊下に向かう。

「なんだよ？」

夏樹の態度に軽く頭を抱えるクリスマスだったが、それは夏樹に答えがでてないということ……

「はあ〜……………もう、人間って記憶力ないよね〜」

なんて、文句を言いながら俺の頭を掴むと、久々の魔法……………つてかクリスマスも魔法使えたんだ……………

『先の夢に還し……汝望むのは過去への想い、真のモノを映せ』

そう言い終わると俺は自分の記憶の中……………あの悲惨な現場に立っていた……………

神様の事情

「ッ！？」……………「冗談ですまないこともあるんだがな……………

…これはどういう……こ……と」

あまりに突然、自分の嫌な過去を見せられた怒りで、クリスをぶっ飛ばしたくなったが……

『……分かったよね？ 夏樹は写真の男には会ったことはないと言っただけ……今、夏樹の目の前にいるヤツはそいつだよ！？ 今ごろ気が付いた？ 次いくよ……』

皮肉と一緒に自分の思いを告げるクリス。
今度は周りの空間が曲がり始めて、今度は

『この鉄骨が落ちてきて拓矢とか言うヤツの姉が死んだ時も！
ここも、こっちも、これもだよ！！ 全部、同じ男がいるでしょ！
？』

『大事な物、場所、人、気持ち、それは何か一つの繋がりがある』

これはそうゆう意味だったのか……だからって！！

神様の事情

「……お、俺が側にいたからだろ！！ だからみんな……
……！？」

そうだよ……今までなんでそう思わなかったんだ……

(コイツの狙いは……俺?)

「な、なんで俺なんだよ!? そんな殺す価値が俺にあるのかよ!
? それに」

最初の方はその男はイライラしていたが、俺が成長するにつれて
周りの人を殺して俺が悲しむのを楽しんでる。

また空間が歪み夏樹は光に包まれる。

「それが真実……人間の記憶なんて薄いモノなんだよ……大切に
な人が周りで死んでも忘れちゃうんだ」

記憶の中の場所から、もとの家の廊下に立っていた……

「アイツ誰なんだよ……」

今はただ、力なくそれだけしか口に……聞くことが出来ない。

「神界の暗殺者、通り名は【螺旋のダルス】本名は不明、基本的に

武器は大鎌で白のマント愛用、魔法で得意な属性は風で、爆発に
しては今だ不明な点があり」

「待て、待て！？　なんでそんなに知ってたんだよ」

なぜかペラペラと俺の仇の情報を話す、クリスに違和感を感じた
ので聞いてみた。すると意外な答えが返ってきた……

「私の親の仇だから」

「マジかよ……」

今日はいろいろ、ありすぎたので一旦気絶さしてください。

だけど、これでアイツとは仲良くできるかもな……

……

第十三話 真実との繋がり（後書き）

クリスと夏樹の繋がりがでてきた今回……まだまだこの先、複雑に絡み合う物語の序章にすぎません！。【螺旋のダルス】二人の仇の名前ですね……こいつの存在にはある人物・神様が裏で関わっているなど！……まだまだ謎の多い 神様の事情 ですが 楽しく読める作品目指して頑張ります！！

第十四話 探し『モノ』

ふてくされた顔でクリスが、夜空の月を眺めている。

それを見た夏樹はスルーして玄関の扉に手をかける

「ちょっと!! 話しかけてよ!!」

コトが出来ずに、仕方なく話しかけてやる。

「ふ〜……なんだ？」

「あのね〜……物語が進まないから、『夏樹と拓矢の仲直り』までとばしちゃうおうかなって」

「なんで、そう読者を無視した発言なんだ……いつか恨まれるぞ？」

『破壊神』だからってやって良いコトと、悪いコトがある。

「ダメ???」

「ダメだ、それと読者無視発言禁止! 以上!」

『ええ〜!?!?』なんて言ってるクリスを無視して、出かける準備をしていた夏樹は玄関の扉から出る。

夏も終わりに近づいていると感じるくらい、外は半袖では涼しい風が吹いている。

「よしっ！ 行くか」

と、思ったやさきに

『……………おい！？』

小さい声だが何かに呼ばれた……………このムカつく声は 生物学
的にありえない存在の首輪

『やっぱり、お前ムカつくな！？ それになんで夏樹とか呼ばれる、
汚い存在に俺がくっついてるんだ！？』

腕を見ると首輪がくっついていた。

「黙れ首輪。捨てるぞ！？」

たかが、首輪にそこまで言われるとムカつく……………それに聞きたい
のはこっちだよ。

あれっ……………確かあの時

数分前

「んっ？」

出て行くために軽く用意をしていると。
ナツが肩に乗ってきた。

「なんだよ？」

ナツは笑って妙なことを口にしながら飛び降りていく。

『貸してあげるわ』

「?????」

あの時か……………

『無視すんなあ~~~~!!』

暴れているので、引っ張ってやる。

『ぎゃあ~~~~!!』

(俺、こいつクリスと同じくらい苦手なんだよなあー)

まあ今さら帰って置いてくるのも面倒なので、そのまま連れて行くことにした。

『ど、動物虐待だあ~~~~!!』

(本気で、捨てようかな……………)

その後も、騒ぎまくる首輪をつねりながらだったが、目的の場所に着く。

(コレでどうなるか……分らない。『拓矢』がどうしようかと、俺には止められないからな……)

この時、俺は殺されてもいいと言つ覚悟があつた。

俺は拓矢の大切な人を二人も奪つてしまったから……

心の中でそう思うと、今は家の前にある夜の学校に忍び込む。

この学校は鍵の壊れた裏口が二つあつて、そこに行けば夏休みだろつが忍び込める……なんとも開放的な学校だ。

『ねえねえ……もしかして泥棒？　そこまで落ちぶれたんだ夏樹……』

このクソ首輪……と思ひながらも無視して屋上までの階段を上り始める。

コツツ、コツツ、コツツ。

(足音！？　なんでこんな時間に人がいるんだよ！？　いつも、めんどくさがつて帰るくせに！？)

心中で毒づきながら、とにかく近くにある壁に背中をつけて来るのを待つ……

(ねえ！？　なんだか盛り上がってきたけど、殺るの？　殺るの！？)

(うるせえ〜な!? ……………!)

頭の上に閃きライトが点灯した。

急いで腕から蜜柑を外すと

おもいつきり、足音のす

る方に向かってぶん投げた!!!

『ぎゃああ〜〜〜!!!!!』

蜜柑の叫び声と同時に階段をいっきに駆け上がり、屋上の扉の前に立つ。

(お前の犠牲は忘れないぞ…………たぶん)

屋上の扉を開く。

強い風が吹き抜けて、縦に長い屋上のフェンスの端…………そこには町を見下ろす、拓矢の姿があった。

拓矢がこちらに気付き…………フェンスに背を向ける。糸が繋がった…………夏樹はそれを辿り言葉を伝える。

第三者が現れなければ…………

夏樹が口を開く直前、目に入ったのは　　白いマント、古びた大鎌。

夏樹の人生を狂わせた神。拓矢とクリスの家族の仇。

『死ね！！』

拓矢が気が付いた時には、大鎌が振り上げられた瞬間だった。

これ以上誰も目の前で誰も死なせたくない！！

だが間に合うか間に合わないかは微妙な距離　　舌打ちしながらも走る

（間にあええー！！！！

）

第十四話 『探しモ』 (後書き)

初のPC書きです(笑) 投稿は携帯ですが……とにかく今回はまだ、出てくる予定のなかった蜜柑を結構使います。少しだけ蜜柑の秘密が次の話で明らかに！(笑)

第十五話 鈴の音色

少し前から気付いていた

自分の力、速さ、体の頑丈さ、どれをとっても普通の人間には到底真似の出来ないモノになっていた事に

今、何でこの力があるかなんてどうでもよかった

……俺はこの力で……今まで救えなかった人達を救うんだ

あの大鎌が振り下ろされる直前から走り

0.5秒

風を切るように進む

空気の壁、それが夏樹のスピードを緩めてしまう。

(くっ！？　なんでこんな重いんだよ)

空気の壁がいつもより厚く感じる。

1・2秒

助けたい。

助けたいんだ。

誰が殺させるかっ！！
俺の前じゃ二度と、誰も殺させない！！

その夏樹の後ろ……屋上入り口、影がちらついた

（！？）

次の瞬間、桁違いのスピードで耳元を通り過ぎていく
何か』が夏樹の身体を後ろの壁まで吹き飛ばした。

「ぐっ！？」
かはっ！！？」

なんとか足で踏ん張ったが、やはりその勢いで、コンクリートで出来た壁に跳ね返る勢いでぶつかり、壁に蜘蛛の巣状のヒビが入る。

（ぐっ！？ アイツ、仲間が居やがったのか！？）

うつぶせに倒れた身体を起こしながら、思考をめぐらす

(身体はなんとか大丈夫なようだが……………!?)

「拓矢!? 拓矢!?」

思い出したように、叫ぶが返事は無い

吹き飛ばされた時、足が地面にこすれていたせいでコンクリートのタイルはめくれ上がって、目の前は砂煙で見えなくなっている……

夏樹の頬を汗がつつ

屋上に冷たい風が吹き、煙が晴れてきて……………一番最初に見た景色は

『お前さ〜!? さっき本気でぶん投げたろ!?』

誰だよあんた!? 俺あんたしらねえよ!?

目に映るのは上半身裸の青年。顔は綺麗に整っていて目は炎のように明るいオレンジ色。

左手には、先端に拳ぐらゐの球体が付いた長い棒、足に付いたホルダーには銃が見えていて、右手には気絶しているらしい拓矢が抱えられている。

「い、生きてたのか っってお前、誰なんだよ!?!」

安心と同時に傷の残る体だが警戒態勢をとる。

『……そうか、こっちの身体で会うのは初めてだったな。蜜柑だよ、み・か・ん!』

はい!?

固まる夏樹を尻目に、前に『いる』神に向かって言い放つ。

『その《体》じゃ俺に勝てないぐらい分かるだろ?』

ニヤつく蜜柑を、無表情で見る神は屋上のフェンスをぶち破り夜の街に消えていった

その姿をただ見下ろす蜜柑に、夏樹が怒鳴り声を上げる。

「おい!?! お前強いんだろ!?! なんで逃がしやがった!?!?」

大きなため息をつく蜜柑は、目の前から消えて

『黙れガキ……』

(?!?) 気配も感じさせないで、俺の背後に回りやがった……)

レベルの違いを感じてしまい、冷や汗がでる……蜜柑は本気をだせばたぶん、俺を瞬殺出来るだろう実力をもっている

『よ……それと、敵討ちなんか止めさせとけ……これは、俺の助言だよ』

視線は俺を見てなかったような気がしたが……今度は、真剣な空気を急に冷めさせて、笑いながら話す。

『ふわぁ〜……さすがに疲れた……寝るから、ちゃんと連れて帰れよ!?!?』

それだけ言うと『首輪』の姿に戻ってホントに寝てしまった……

「おい……」

突然した声に驚いたが、拓矢が目を覚ましたようだ。

「うるせえ〜、寝てるよ……」

心にも無いことを口にしてしまう……

拓矢はその言葉を気にしないで続ける。

「あれが……俺の『仇』なんだよな……」

「ッ!? なんて」

拓矢は全部、知たようだった……

それらは今、蜜柑から聞いたモノと　自分の目で、『緋音さんが死んだ時』見た神の姿。今、出てきた神……それらの『糸』が、すべてそろった時、蜜柑の能力かは分からないが、全て分かったよ
うだ……

「わるい……」

「あやまん、バカ……」

「でも　　ッ!？」

パンチが顔面にクリーンヒットした。

「これでチャラだ……」

「お、おう……」

風が気持ちいいな

拓矢は仰向けに寝て空を見ている。俺もその隣で座りながら空を見上げて疑問をぶつけてみる。

「なんで、『あの時』お前居たんだよ……」

こちらを少し見た後、また空を見て答え始める。

「子供みたいなことでケンカ……しちまったから、謝るために探してたんだ……」

あつ……そういや緋音さん、落ち込んでたよな………！

夏樹は思い出したようにポケットに手を入れて、何か探している。

その様子に気付いた拓矢が起き上がると、目の前には綺麗な音のする鈴があつた。

「????? ……お、おい……これってもしかして」

最初は分からなかったみたいだが、拓矢は驚きと一緒にその鈴を受け取る。

「そうだよ、お前が欲しがってた【ルノアの鈴】だよ。高かったんだから大事にしろよ」

【ルノアの鈴】……この世にたった百しか残っていないルノアで作った世界でも最高クラスの鈴。その音は聞いたものを虜にすると言われている……拓矢はそれを骨董品店でたまたま見つけて欲しがっていたのを、俺が昴から聞いたんだ。

「お前が買ったのかよ……」

それを聞いて、否定をいれて答えてやる。

「半分以上、ってかほぼ全額『緋音さん』が金出したんだよ……！それがあの人からの……お前への最後のプレゼントだよ……」

拓矢は目を見開いて驚いた後、鈴に眼を戻し、俺のいる方と反対の方向を向いた

リン
リン

鈴が鳴る。

聞いているか？ 緋音さん……やっと渡せたよ……

一つ心の鎖が取れた気がした

まだいくつもある鎖だけど……今はどうでもよかった

風が吹き

鈴の音は風に乗って町中に聞こえている

第十五話 鈴の音色（後書き）

蜜柑の正体、拓矢と『たぶん』出来た……絆。

なかなか盛り上がってきた今回ですが、まだまだ秘密はたくさんあります。

謎も書くのがめんどくさくなるぐらいあります。

ですが、これからも書き続けます（笑）

神様の事情、今後とも読んでいただけるよう努力しますね。

第十六話 神界・昴・ だあゝ

存在が消えていく……

誰も僕を見ていない……

目の前を通りすぎる人、形は決まっっていて、まるでロボットを見ているようだった……

それが波になって道路を埋め尽す……

どこを見ても人しかいない……ただ虚ろに前を見続けている眼は……何を見ているのだろうか……

そんなことを考えていると

風をも切り裂くだろう鋭い音が聞こえる。前、後、左、右、それぞれの方向から 近付いてくる。

ついさっきまで目の前にいた人が、今は血を噴き出しながら倒れているのが見える。

死んだ？

うん！

け 幼い子供の声だ……周りを見渡すが、転がってるのは『死体』だ……

アイツ何？

俺に気付いたみたいだ……

何だろうね？

じゃあ……

突然、目の前に白いマントに身を包んだ、子供が四人、それぞれに特殊な形をした武器を持っている……

あれっ？ 顔が見えない……視界がそこだけぼやける。

殺しちゃっう？

武器を振り上げた瞬間、光が体を包んだ

！？

「うわぁっ！……!?!?」

目の前に広がるのはいつもの部屋、いちようカーテンを開けて外を確認すると、変わらない東京の町が見えている……

「ふうー……夢か……あぁん!?!?」

目の前の光景にビビる。

目線の先、下の方に東京タワーの一番上の棒あたりが見えている……ここは地上540m……たぶん。

〔目算です。夏樹より〕

「あらっ　起きたのね？」

ルミさんが、普通に俺の部屋に入ってくる……違う!?　俺の部屋はいたって普通な一軒家の二階、廊下一番奥の部屋のはず!?　ここはまず……地上何階だ!?　確かに俺の部屋と作りや、置いてある物は一緒だが……俺の部屋ではない!!　……ないと願いたいです……

「ごめんなさいねえ　驚いたでしょ?　家ごと持つてくる計画だったのに、『アキラちゃん』に止められちゃったから仕方なく真似だけで我慢したのよ……」

(国家権力の無駄使いだよルミさん……)

……とにかくアキラさんと呼ばれた人には、会った時に絶対お礼を言わなきゃ、と本当に感謝した。

すると、いつから居たのか隣にはクリスが居た。

「むう……」

が、ご機嫌斜めのような……いったい今度は何が気にいらないんだろう。と、心配しながら『仕方なく』理由を聞いてみた。

「私が前の話で一回も出てなかった……だからここまで飛ばしたかったのに……」

それが理由ですか……それだけの理由で次回の話を終話とかにしないことを願ってるぞ……

そんなクリスの状態を小説存続の危機から救うために、頭を撫でてやる。

「仲良くなつたわねえ……」

ルミさんは驚いてるようだ。

(違うよルミさん……小説が終わらないために『仕方なく』やって
いる事なんだから……)

心の中で否定しながらもルミさんになぜここに連れてきたのか聞いてみる事にした。

「ところで、ルミさん。俺とクリスをここに連れてきたのか訳はなんですか？」

「ええ、それは」

「結婚式の日程を決べえ　　びいつ!?!?　　むうー!?!?」

クリスの口を塞いで暴れるのを止めながら、ルミさんに顔を戻した。

「んっ?　　いいのお?」

さっさと話せよ。

「まあ、神界側の状態が少し悪くてねえ〜 勢力図がかなり変わったのよ　それで日本が大変なのよお〜　!？」

あまり問題があるように聞こえない話方のせいもあり、まったく危険性が理解できない。

「あの……それホントに大変なんですか？」

「大変も大変、だって明日にもこの東京に悪い神様達がたくさん降りてきて、人間狩り始めてもおかしくない状況なのよお　？」

……それはかなりマズイ状態なのでは？　そんな時に一般人の男子高校生や、変な神様代表にもなれそうなクリスと会っていいのかアンタは!？

「とにかくう　それだけ伝える為に………」

俺の前のクリスに目をやるルミさん

「それ以上やってたらクリスが死んじゃうわ………」

「えっ？　……うわあ!？　わりい、クリス!？　……大丈夫か!？」

慌てて手を放すと、クリスはかなり大きく深呼吸を何回もしたあと、俺を見て

「お花畑見えたくない!? ホントに殺す気!?!?」
クリスの口調が真剣モードだ……マジで危なかったんだな……

そんな俺達のやりとりを見ながらルミさんは言った。

「まあ来るときゃ、来るんだから今考えても仕方ないのよ……だから今はクリスや他のみんなと仲良く遊んでなさい」

真剣な声色だったような気がしたが……ルミさんを見るといつもどりの顔をしていた。

クリスは不思議そうにルミさんに近付くと

「いたたたあ!?!? ちょ、ちょっとクリスちゃん何するのよお!?!?」

ルミさんのほつぺたをつねって、『ん……やっぱり違うかな?』なんて言ってる。変人よ……なぜそう行動が突発的なんだ!?!? ワケが分からんにも程があるぞ!?!?

ルミさんはつねられたほつぺたをさすりながら、また話始めた。

「とにかく、みんなは遊んでなさいよお!?!? 首つつこんじゃないダメよ?」

で、だ!?!?

都庁2の、外に出たまでにはいいでしょう……

「おそかったな？ 早く学校行かないと、遅刻だぞ？」

「そうよ、新学期そうそうに《クソ》兄貴のせいで遅刻なんてムカつく……」

拓矢と優希が待っていた。なんでいるんだよ！？ ここ、D神関係者以外立ち入り禁止エリアじゃねえのかよ！？ ルミさんあれ嘘か！？

「私達はなんでか知らないけど例外みたいね……まっあなた達の関係者だから、大丈夫なんでしょうけどね」

二人の後ろから聞きなれた声があった。

「昴か！？」

あの夢の中での俺（過去）を見て以来、連絡をとっていなかった……いや、話にくかったのかな……
すると昴はいきなり頭をさげてきた。

「……ごめんなさい。私、聞いてはいたけど夏くんの過去が、あそこまで酷かったなんて知らなくて……」

「バカ、別にあやまることなんてないって。それより、拓矢と優希には話たのか？」

二人が付き合えなかった理由。俺の過去の事、拓矢の想い、優希の想い……それと昴の想い。

「聞いたわよ……」

「俺はあの夜聞いたからな、優希には話したよ」

二人のやりとりを見ていると、もう大丈夫だと思えた……

「昴、理由はどうあれ、これで二人は大丈夫そうだし、そろそろ『フリ』はやめようか？」

俺がそう言うと昴が何かを決心したように、俺をに顔を向けた。

その目は終りかけの目じゃなくて、これから始めよつと言つ決意の目

「夏くん……」

初めは弱々しくて、けど少しづつ声が大きくなる。

「私のわがままに付き合ってくれて、ありがとう……それと」

それが夏樹の心に届くかどうかはわからない……それでも言葉を続ける昴。

「私のわがままを、もう一つだけ……聞いてほしいの」

『嘘の関係』それがもうなくなるから……今度はホントの自分の言葉。

「んっ？　なんだよ？」

見守る拓矢と優希はニヤけている。どこかに行ってほしかったが、こうなれば、無視するしかない。クリスさんは……あれ？　いない

……

遠くの方の三人と一匹の人影に気付かない普通人間の昴は続ける。

「私は、夏くんにいろいろもらってきた……それは、たぶん私をいっつも元気にしてくれた……」

大切なのは気持ち、今の私、自身の気持ち。

「夏くんの過去は……私にはまだ重いけど、それで私は夏くんを嫌いになんてならない……それにあの人達のように私は絶対に、ならない」

伝えなきゃ始まらないから、それがどんなにつらい結果でも……

「ウィル君が、私に魔法を教えてくれるって、言ったから……だから私は死なないから」

聞くのは怖い……でも、これで終わるくらいなら死んだ方がマシ

だと思えた。

夏の終りを告げるような優しい風がビルの間を抜けて、昴の綺麗な髪を揺らした。

「好きです。……もう嘘の言葉なんかじゃなくて……夏樹くんが好きなんです」

その姿はホントに綺麗で、この風より優しい『言葉』をくれた昴
頬がほんのり赤く染まるのを見て、夏樹も赤くなってしまっ

昴はホントに可愛かった、今まで昴が嘘で仕方なく付き合っていたら、そう思い込んでいたから……あまり見ていなかった。

今まで何を見てきたんだろうと、本気で後悔しかけたが、まず返事をしなければいけない

「！？」

言葉が出ない……

自分の情けなさを改めて実感する夏樹に昴は言った。

「返事は今じゃなくていいから、私は待ってるから……」

そう言い終わった昴は急に後ろを向き……走って逃げていく。

「えっ！？ えっ！？」

焦って追い掛けようとする、ある程度離れた場所から、また昴がこちらを向いて聞こえるように

「夏くん大好きー！！」

夏樹は固まる。

それを見ていた妹が頭をおさえながら口をひらく。

「あゝあ、《バカ》兄貴また固まったよ……それにしても大胆だね拓矢」

「そうだな、優希もするか？」

このバカカップルとなりで……しかも妹といちゃつくなよ……と頭のみすみで考えたような考えてないような……

固まっている夏樹を一瞬で『ぶち壊し』そんな殺気を感じて、命の危機に体が動くようになる。

「ふう〜ん　クソ女に告白されて何を喜んでるのかな　？　なんで断らなかったのか聞こうじゃないの」

クリスは今なら悪い神がいくら何匹降りてこようが殺せるだろう
殺気を放っている。

「ま、まで……俺はまずな、お、お前との結婚を認めてない。そ、
それに今は誰に恋しようが自由なはずだぞ!？」

この後すぐに、風にのって夏樹の叫びが町中に聞こえた……よう
な気がする。

それと予定どおり学校には遅刻……学校が始まってそうそうに教
師の説教を聞くことになる……夏樹の顔がボコボコなのが気になっ
たが。

第十七話 東京

「お前達は新学期が、始まっててもまだ遅刻か!？」

うわあ〜……やっぱり、桜木ム力つくな〜……

今は学校だ、あの都庁2前での告白事件以降は俺、昴、優希、拓矢は一緒に学校に通っている。

クリスは学校で勉強するのが嫌なので、この学校には来ないみたいだ。

(寝みい〜……)

それに最近、この四人でウィルに魔法を教わっているので、よく学校に遅刻するのである。

「聞いているのか!？ さっきからお前らは……」

いきなり怒鳴り声がやんで、俺が桜木の顔を見た時、何かとてつもなくイヤな感覚になった……あの蜜柑の殺気のような『死』をイメージさせる感覚

「(どうしたの？ 桜木なんだか変じゃない?)」

優希もその不思議な感覚に気付いたようだ、桜木に聞こえないように聞いてくる。

「（分かってる……なんだかイヤな予感がするな……あたらなきやいいんだけど……）」

それとほぼ同時に、桜木が俺に妙な質問をしてきた。

「お前達……『クリス』と言う女を知ってるか？」

顔からはやはり殺気のようなイヤな感覚しか伝わって来ない。後ろに居た優希が答えそうになるのを片手で止める。

「知らないですけど？ ……その人が何か？」

後ろの三人は俺に不思議そうな視線を送る。

だが桜木はそれだけ聞くと、目の前から煙のように消えた……

妙な感覚が消えてしまったので、夏樹は考えるのをやめてしまう、面倒な性格だ。

それを見ていた俺と優希はウィルやクリス、ナツが日常的に目の前から消えているので、まったく驚きもせず『説教終わった』と、そのまま職員室を出ようとしますが、昴と拓矢に激しくつつこまれた

「どうなってんだ！？ 何で桜木が消えたんだよ！」

拓矢はやはり驚きを隠せないようだ。

今は職員室を出て一番近い俺の入ってる部活の部室に来ている、まあ拓矢の問いに俺が、やはり軽く答えた。

「いや、だから普通だろ？ 別に驚く事ないんじゃないか？」

「夏くん……普通じゃないよ……」

さすがに昴も驚いているようだ。

そんな、無駄話をしていると、突然部室の扉が開いた。

そこには、見慣れた妙な文字の書いた服装ととんがり帽子に身を包んだ、一人の女の人

「ルミさん？ なんでここに……」

「驚かせちゃった？」

じゃあ、まず服装をまともしてくれ。

「……まあいいわ。夏樹君に用……が……って、もうなの！？」

ルミさんは少しイライラした感じで、俺達の後ろにある窓の外を見ると同時に

「……な、なんだよこれ！？」

目の前の景色が青白い光に包まれていく

空は灰色のような薄い色になって、なんだかこの町が時間から切り離されたような、そんな感じ……

「なんなの!？」

周りで三人も驚き空や目の前の景色に見入っている。

「……もしもし、私よ」

ルミさんは携帯でD神に連絡をしている

「この空間に入れそう？」

『い、いえ……それが……』

口籠る、秘書の女に違和感を感じて、冷静に聞き返す。

「……『N・C』の規模は何所までなの？」

『……東京全体です』

「くっ!？ ……手回しの早い奴らね……」

この言葉の重大さがまだ俺には分からなかった

東京は今、この地球から消えたのだ

だがそれに気付く者は誰もいない

神様の事情

第十八話 心

「この色……懐かしい気が……!?!?」

急に、バットで殴られた様な痛みが頭に響く。

な……んだよ……これ……

頭を抱えた格好で倒れかけた俺をルミさんが気付いて支えてくれた。

「夏樹君!?!?!?」

「っ!?!?!?」

目の前にある景色が突然変わった、この光景は夢で見た事がある。

灰色の世界、人は光を宿さず、闇に染まる訳でもない。この世界の異常さは来たもの全てを狂わせる。

また来たよ!?!?

また幼い子供の声だ。

何なのコイツ?

分かんない……

前は殺し損ねたんだよねえー?

「てめえーらこそ何者だよ!？」

頭に響く痛みを精神力だけで抑えこみ、声だけしか聞こえない子供に聞く。

……何コイツ、死にそんな顔してるよ？

ムカつく……

ふう〜ん？ 教えてほしいの？

きゃははは、じゃあ代償を貰わなきゃ。

やはり、まとまりが有るようで無い子供達。

教えてあげる

世界の真実

四人の子供が目の前に現れて、歌うようにリズムを創る

僕らは“時の支配者”

物語を創る者

世界がまた歪み始めた、高い建物が崩れ始め、空が黒く染まっ
ていく。

代償は貰ったよ、夏樹っち

以外と美味しかった……

「なっ!? な、何で俺の名前を……」

夏樹君!!!

「っ!!!!!?」

目の前にはルミさん、周りには他の皆が居た。いつのまにか学校の外に出ていたが多分ルミさんか、拓矢が運んでくれたんだろう。

周りを見渡すがさっきまでの光景は残っていない。

なんなんだよ!? ……代償? 何も変わったところは無いぞ?

謎だらけの子供達に今の現状では夏樹の頭がついていかないのも無理は無い。

「夏樹君大丈夫なの!?!」

「は、はい!?!」

あまりの最悪な状況に、ルミさん達の事を少し忘れていた、

「とにかく一般人の拓矢君、昴さん、優希さんはD神の戦闘部隊に預けるわよ? いいわね?」

黙って頷く俺に、微笑むルミさんは立ち上がると、携帯で連絡をとり始めた。

「昂？」

空を見上げている昂が目に入った、その目には涙が見えたような気がした……

「夏樹！！！！ 大丈夫！？」

「ぐはっ！？」

突然、横から飛び蹴りをかまして、心配するバカは一人しかいない、

「……く、クリス」

「？ 何、変な格好してんのよ」

こ、これが代償か！？ ……ならあのガキども殺すぞ！？

クリスに続いてウィルとナツも来たようだ。

「あれ？ 新種の体操？」

『じゃあ“バカ”のポーズかしら？』

……次、会ったら絶対殺す！！！！ クソガキども、殺、殺、殺あ
ああつ！！！！

訳の分からない怒りを感じる夏樹に追い討ちがくる。

「変になっちゃった？ それともバカ」

「ああ、兄貴のバカは元々だって昴さん」

お前ら状況をもう少し考えろよ……

「コントしてる場合じゃないわよ!？」

ルミさん……真面目に俺だけに、それ言つの止めて……かなり傷付く。

「……ルミちゃん、後は僕達がなんとかするからこの子達連れて行ってよ」

ウィルの言葉に黙って頷くルミさん、その時丁度、到着したD神の車に三人を乗せるとルミさんはこっちを向いて、

「……アナタは車に乗りなさい」

「なっ、なんでだよ!？」

口論になりかけた時、クリスマスが俺の前に立ってルミさんに話しかけた。

「ルミさん……私は、今から神との戦いだけでも経験させとくべきだと思っただけど、必ずいつか戦う運命なんだから」

久々の真剣なクリスマスに、ルミさんも少し睨みかえしたが、少し笑いながら背を向け『負けたわ』と言って車に乗り込んでいった。

「夏樹、必ず帰って来てよ……」

昴の真剣な表情に、俺はまだ答えをだしていなかったし、その罪悪感もあったけど、今はそんな状況では無い、だから首を縦に振っておいた。

車が走り去るのを見送りながら、ウィル達と今後の予定をたてる。

『このままだと、この東京は無くなるのね……』

話の中で、クリスが“N・C”の事を教えてくれた。

“N・C”

神界では、陣記と呼ばれていたりする。

神が戦場となる場所に創る空間、現実世界に影響を出さないようにするための魔法とも言える。

と言う事は、俺達は神と戦うことになるのか……俺達だけでなんとかなるのか？

それは、当たり前前の問題だろう、相手は神、身体能力だけ高い人間と、意味不明な話す猫、銃を使う小学生のガキに変身する首輪。唯一の頼りの神はと言うと、攻撃こそ最大の防御と言うクリス一人。

これから、どうする………

「悩んでても仕方ないよ、早めに神を倒すしかないんだから……」

ウィルの目線の先には学校の裏にある山が映っている。

『……?』

ナツの尻尾がピンとアンテナのように立っている、何かに警戒しているようだ。

「どうした?」

俺の声も聞こえていないのか、目を閉じて何かに集中している。仕方なく、もう一度呼ぼうとした時、

『……!! 何か来るわよ!?!』

地面が突然、揺れ始めたのを俺達を感じ始めた瞬間、

コンクリートの道路を突き破り、数え切れない程のいろんな形の剣が目の前に浮かび上がった。

ギョル、ギョロン

まるで剣の海。一つ一つに眼があつて。その眼が目標を捕らえるように辺りを見渡して、雨のようにクリスに襲い掛かってきた。

「ふう……」クリスは、ため息と一緒に手を剣にかざした。

第十八話 心（後書き）

久々の投稿で申し訳ないかぎりです。
次話は早めに投稿しますから、許してくださいね（汗）

第十九話 戦いの中にある想い

目の前に迫る剣の雨。

クリスは無表情のまま急ぐ様子もない、
そんなクリスに対して俺達は剣と戦うだけで精一杯だった。

「なんなんだよ、これ!？」

「神の使役するゴーレムとか言う奴だよ多分!!!」

その会話の途中にクリスに、いくつにも折り重なった剣の波が襲いかかるうとしているのが、やっと目に入った。
危ないと叫びかけたその時、

クリスの前、数十センチしか離れていない、ゴーレムの群れ（剣の雨）が一瞬にして動きを止めた。

『……さすが破壊神、と言ったとこね、“滅びた魔力の集合体”……
…危険だわ』

ナツの言葉の意味、まったく分からなかったけど、今俺達の周りで起きている“不思議な現象”の能力だけは分かった。

空間固定魔法、

N・Cもこの魔法の枠に入るが、この今起きている現象はもう少し違う。

さっきまで動き回っていたゴーレム達は、眼をギョロギョロと回すだけで襲ってくる気配は無いのも、普通に俺達が話しているのも、

そのお陰であって……

一般的に言うなら、ストップ対象認識固定魔法。

少し難しく感じるかもしれないが、そんなに難しくも無い、一般的な神にも使える魔法だろうし、ただナツが言いたいのは多分、数の方だ。

辺りを見渡すが剣の数は数えきれない、それをこの一瞬で、対象を認識し、空間を固定する。名前の通りそれをやってしまったのだ

……

「……まあ、お陰で無駄に体力使わずにすんだからいいじゃん」

『そつだぞー!!』

一人と一つに釘を刺されたナツは少し苦い顔をしていた。

「……お前達の主は誰？」

クリスの問いに、剣は今まであかなかった口を開き話だした。

『化け物じみた娘だな……“奴らが”血眼になって探す訳だ……答えてやってもいいのだが、使い魔ゴレムである以上は、主の名は死んでも口にできん』

ゴレム、俺の想像していた石の巨人や魔物モンスターではなく、剣。

それに話し方や心に秘める想いは、俺達と何も変わらないような気がする。何故か分からないけどそんな気がした。

「そう……じゃあまた会うことがあれば、その時はよろしくね」

そう言うとクリスは手を空にかざして指を鳴らした途端、剣は一斉に光の玉となって消えていった。

最後に見たゴーレムは、顔も無いのに笑ってるように見えた。

「……………どうなったんだ？」

俺の言葉を見殺してナツは言った、

『優しいのね……………』

「ふん……………別に、ただそんな気分にならなかつただけよ」

後から聞いた話だけど、ゴーレムって言うのは狭間の世界から呼び出される者や物、だと言われた。

神になれなかつた落ちこぼれと呼ばれる事もあるらしい。

「行くよ、夏樹」

「あ、ああ？」

走り出した、クリスの背中からは悲しい感じが伝わってきた

ウィルが見上げていた山のふもとに着くまでの間、何度もゴーレム達が襲って来たが、クリスの活躍もあって、ほぼまともな戦いも無くここまで来れた。

「後は、頂上付近に居る神を倒すだけね」

「やっとかよ……」

クリスはゴーレムとも戦い慣れしているからよかったが、俺達はゴーレム戦なんて今日が初めてだったのだから、少し無駄に体力を消費していた。

「少し体の動きが良くなってきたかな？」

『まっそこそこだけどね』

コイツら……それに強い筈の蜜柑は一度も戦闘に参加してない。

『ふああゝ、寝むう……』

かなりムカつくな……

「つと？ ……またお客さんが来たみたいだよ、夏樹」

クリスの声に反応して起き上がった俺は、さっきウィルから貰った“ある物”を構えようとした時、

「先に行っててよ、後から追い付くから!!」

『そうそう、二人とも先に行って!!!!』

最初に出てきた時の倍以上はある剣が、浮かび上がり始めた。

「……仕方ないか、行くよ夏樹」

「えっ!? ちょっと!? あの数ヤバいだろ!?!」

クリスのため息と同時にナツの音が響く、

「クリスにばかり、おいしいところもってかれて、イライラしてんのよ!?! 大丈夫だから早く行きなさい!?!」

「そうそう、僕達の心配なんて百年早いかな?」

「……はあ、バカは言うこと聞かないから困るな」

酷い言われようだ、特に何もしてない糞首輪に言われたのが一番イライラする。

「分かったよ!?! ったく人が……」

クリスの後に続くように山道を走り出す。

夏樹の背中が見えなくなった瞬間に、首輪が姿を変えた。

「ふうあ〜……なあ、クリスに任せて大丈夫なのか?」

青年は手を高々とあげて無防備に聞き始めた、

「大丈夫だよ、彼女はしっかりしてる。だから夏樹にはちょうどい

いんだから」

ウィルは何処から取り出したのか、二丁の拳銃を構えて立つ。

『……私はあまり好きになれないかも』

二人が笑いだした瞬間、ゴーレムが動き出した。

その光景は海のように、波のように流れを作り襲いかかってくる。

山を登り始めて直ぐに、妙な感覚に襲われた。

ネバネバとした絡み付く視線、だが周りにそんな視線を送る奴などいない。

なんだよこの妙な感じ、クリスは何も感じてないようだし……

「どうしたの？ 何かあった!？」

「あつ、わりい別に何でも無いから」

ダメだダメだ、余計な心配させちまったな。

走り出して二分ぐらいだろうか、やっと頂上が見えてきた。

山と言ってもあまり高くは無い、周りは住宅ばかりでこの山も最

近では、頂上付近に天文台がつくられたりして近づくにつれて、木が無くなっていく。

道路も作られたりと頂上は天文台以外何も無い野原となっている。

「ここが頂上だけど？」

辺りを見渡すが何も無いし、誰もいない。

「？……あれは何？」

クリスが指を差した方には天文台があった、だから気付けたのだが、月の光に反射して剣が光が見えた。

キンッ

一瞬で近付いてきた神の剣を防いだのはウィルから渡された二本の刀。

「誰だよテムエ〜！？」

防がれた事に驚いたのか、なんなのか分からなかったが、後ろに飛び剣をまた構えた。

「……お前はさっきの？」

この声には聞き覚えがある、桜木……

「何、こいつ……神に体を売ったの？」

神に体を売った？

「契約よ、体を神に捧げる代わりに自分を神にする、そんなもんでしょ？」

「……ふははは！！！ 人間を神にする契約だと？ 笑わせる、コイツの体はただ貰っただけだよ！！！」

「……バカね、それでも結局はその状態で……」

クリスが動きが止まった、いや震えを抑えようとしてるだけか？
怒ってる、クリスが？

「ほう、知ってるようだな？ この契約を？ さすが“呪われた神

「黙れ！！！」

桜木の中に居る神が言いきる前に、クリスが爆発を起こす。

桜木の体を奪った魔法は、前の破壊神が作り出したとされる自分の体を変える魔法。それは他の神によって封印された筈なのだ。

神界で何かがおこっていると、ルミさんは言っていた、あまり首をつっこむなと……

「って、今はそれどころじゃないか！？」

クリスは怒りで周りが見えてない、

「どうした？ こんなものか？」

「黙れええー！！！！！」

クリスが溜めた一撃を桜木が当たる直前に交わし、心臓に向けてクリスに剣を刺そうとした瞬間、夏樹がわって入ってきた。

「えっ!？」

「……バカかコイツ？」

桜木の持つ剣が体に食い込み、血が噴き出す。

血はクリスにかかったが、夏樹はクリスだけを見て笑っている。

その勢いのまま、地面に剣と一緒に叩きつけられて、体は跳ねずに剣が柄の部分まで刺さりきった。

「ぐっ!!!？」

「何してんのよ!？」

クリスが近付いてくる、幸い桜木は空中で浮かびながら、俺達を見ているだけのようだ。

最後の会話に時間をやろっつてか？

自分で言っつてて笑えてくる、

それよりクリスは慌てながらも、俺の腹に刺さってる剣だけを破壊神の力で破壊して、傷を治し始めた。

俺の事考えてくれてんのかな？

普通なら剣を引き抜くだろうが、柄の部分まで刺さりきった状態

だったから痛いだろうと止めてくれたのかも、と言う期待もあった。

「ぐっ!? ……はぁ…はぁ……クリス」

「喋らない!!!!」

かなり怒ってるのかな？

治療魔法を使うクリスの額には汗が滲んでいる、かなり力を使うんだろう、それでも俺は話続ける。

「っ、あんなに怒りに任せた戦い方じゃ…はぁ…はぁ…はぁ、勝てるもんも勝てねえーぞ!？」

クリスの手を傷口から離して、握り締める。

「なに!？」

「……俺は大丈夫だから先にあのバカ倒してこいよ!!! あんな神、俺は神だなんて認めねえ!! はぁ…っ、何を言われても、お前が何者だろうと、俺はお前の味方だ、はぁ…、それに、お前の方が神として俺は好きだ」

あんな神に……もう大事なモノを奪われたく無いんだ。

「……………」

クリスは立ち上がって、桜木を見上げた。

その背中を見て夏樹は想う、

……結局クリスに任せちゃうなんて最悪だな俺って……だけど勝つと信じてるから任せるんだ。

桜木がまた手を伸ばすと剣が手の中に現れた。

「もういいのかな？」

これが最後の戦いになることを祈り、クリスは空に舞い戻る。

鉄と鉄がぶつかる音、折れ曲がった剣が次々に消えていき、最後の一本となった時、ウィルの耳にはまっていた小型無線機に緊急の連絡が入る。

「んっ？」

蜜柑の持つ武器の直撃を喰らった最後の一つは粉ごなに砕けた。

「……………なっ！！？」

『どっしたのよ！？』

ウィルは無線機を外して頂上に向かって走り出した、そのあとにナツ、首輪に戻った蜜柑が続く。

無線機から聞こえた声は、また新たな始まりを告げるモノだった。

ピッ

『こちら、D神本部！……移動中の戦闘……より、新たな……出
現と、移動中の三名の乗って……車両が爆発……、隊長……向かった
先で重傷……模……、三名の安否は……だ不明！』

第十九話 戦いの中にある想い（後書き）

少し長めに書いてみました（苦笑）楽しんで頂ければ嬉しいです
笑）

第二十話 消える想い

私が願ったのは世界の平和。でも私は破壊の神、平和とは縁がない神。両親も姉妹も創造を司る神なのに……なんで私なのよ……

なんで私が破壊神なの!?

誰か教えてよ!!!

何かの間違いだよね!?

間違い……だよね?

ねえ……誰か……答えてよ……

キンッ

鉄と鉄が触れ合う音、オレンジ色の火花が蒼白い世界を照らす。

男が手に握るは黒い刀、鏝がなく木で出来た持ち手は赤く染まっている、人間には理解出来ない位の長い年月をかけて人の血を吸い続けた結果なのだろう。

女が持つのは白い光を帯た杖、それは銀で出来ている。杖の一部に刻まれた文字は古代神マリノアが、次の世界の繁栄を願って彫ったとされている古語で、現在では読める者は居ないとされている。

「ちっ！！？」

「……………」

クリスの持つ杖の舞うように動く攻撃を、桜木は軌道を読んで受け流すだけで精一杯になっていた。もともとクリスの実力は人間の桜木とは比べ物にならないが、その桜木を補う神の力にも限界があるらしく、動きがあまりよくないからなのだろう。少し前までは神の経験のみでクリスを上回っていたが、冷静になったクリスは動きが見違えるように速くなっている。だが……

（おかしい……）

クリスに守られてる間に天文台の入り口、その大きな柱に隠れた俺は、考えをまとめようと、普段あまり使わない頭を最大限に働かせる。

怪我で動けない俺にはこれしか今は出来ないから。

（あの神……何故桜木の体に入った？ わざわざ動きにくい体に入れ換える理由があるのか……？）

それは、最初から疑問に思っていたことで、今まで気付かなかつたのが不思議なくらいだ。それに、あの神……動きも不自然な点がある。

ギリギリでかわし続けてるって事は、反撃のチャンスも結構あるはずだ。だけど何故かクリス自身には攻撃をしない。

最初に俺が受けた一撃も……あれもギリギリで止めるつもりで斬っていたのかもしれない。

それに、奴はクリスを殺すために、ここ、人間界に来た筈だ。な

ら何故、本体、神の身体で戦わないのか

(…………他に目的がある?)

それなら、合点がいく事が多々ある。

それに目的がある以上クリスに手は出さない筈だ。それを考える
と、少しだけが安心できた。

安心、

(…………死ぬことは無い?　じゃあ何故…………ああー、くそっ!?
わかんねえ…………)

再び問題が出てきて悩む夏樹は、また頭を抱える。

急に静かになっていた戦いは、クリスが手を止めたからだだった。そ
れを怪訝な顔で見つめる神は、また少し離れた位置についていた。

「…………あなた、なんて名前なの?」

「?　ふん…………今はそれより戦いに集中したほうがいいぞ」

クリスはその言葉を目を閉じて聴き終える。

その雰囲気は、何か決意したようだ。

長いため息と共に、いつもより強く握る杖を大空にかざす。開か
れた目からは、今までに無いぐらいの殺気が込められていた。

「…………名前ぐらい聞いてあげないと、これから死ぬ貴方に失礼だと思
ったけど、やめとくわ…………」

「貴様!!　くそっ、まだなのか

!!!?」

その言葉とほぼ同時、杖から雷鳴が轟いた。その轟音は、街中を翔け巡る龍の形をした光を放ち、町全体に魔方陣を創りあげる。

その光景は世界の終わりを予感させる。だが、美しく、猛々しいが繊細で、この力を持つクリスが神の頂点に立っていてもおかしくは無いと感じさせる。

「……………な、」

言葉を無くす神は魔方陣が完成していく様を、ただ見つめる事しか出来ない。

それは、そうだろう。あの龍は音だ。攻撃で、しかも刀などで止められるものではない。

もし、触れればその場で身体がズタズタに引き千切られる。術者であるクリスはその音の中心、雷の中にいる。

原理は分からないが、クリスは雷が球体状になった中心に居るようだ。

「あの馬鹿、何する気だ!？」

魔方陣を模る龍が雄叫びをあげる。その瞬間町全体が光に包まれた。

「……………な、なんだコイツは」

神の目の前に居るのは、本物の龍。それが人間の世界に現れたのだ。神界でも現れる事が無くなった龍が、人間の世界に現れるのは奇跡に近い。

だが、神が驚いてるのはクリスの方だ、

「よしよし、久しぶりだけど、あんまり話してる時間ないんだ。…」

……あいつ、なんとかしてくれない？」

長い身体を動かし、神に視線を向ける。いくら神でも、龍には勝てない。

「おい、クリス………」

「なに？」

「自分で倒した方がよかつたんじゃない………」

「もう、面倒だしヤダ。この子にやってもらえば楽だしね。……それより傷大丈夫なの？」

神は動く事が出来ないのか、龍に睨まれてからまったく動かなくなっていた。

……それより、コイツにはもう、驚くばかりだ。

「はあー……大丈夫だよ。それよりクリス、これは読者が納得できないぞ」

いきなり龍を召喚して、終わ리と言つのは……俺も納得できない。

「別にいいでしょ、多分、分かってくれるって」と、適当に俺の声を聞き流すと、

「さあ神様、何が“まだなのか!?”なのかな？」

こ、怖ええー……

「な、なんの事だ!？」

「……この状況で、まだ嘘つくんだ？」と、言ったとたんに、龍が神を噛み砕いた。

「ふー……これで一段落ね」

「何が一段落だよ!? まだ敵は残ってるんだろ?」

蒼白い世界はまだ消えていなかった。

「それぐらい、分かって」 クリスの表情が驚きに変わった。

止まった視線の先には、血まみれで木に寄り添っている人物が居た。そこには、見慣れた人の姿が、

「昴……な、なんでここに!?!」

「……体の心配はしてくれないのね。まあ仕方ないか……それより、みんなが大変なの!?!」

俺が急いで昴に駆け寄って行き、木から倒れこむ昴を支える。

身体に目立った深い傷は無く、昴はただ、こちらを舐めるように見つめてくる。

吐息が漏れる唇には艶があった。舌で血を舐めとるようにする、頬からは汗が滲んでくる、その姿は妖艶な雰囲気を感じられる。

それが妙に俺の視線を釘付けにする。

「い!!!」 クリスが何か言いながら走り寄ってくる。

なんだ、これ?

何も聞こえない……

クリス、何慌ててるんだ?

景色が白く染められていく。蒼白い世界が真っ白になる。慌てて近づくクリスの姿も、薄くぼやけて見えてきていた。

神様の事情

身体も動かない……
なんだよこれ？

（ ……何も見えなくなっていく …… ）

第二十一話 大切なのは本人の意思

そこは、雪のように白い世界だった。辺りを見ても、ただ平坦に、地平線も分からないぐらいに、真っ白な地面が広がっているだけで、空も快晴のように明るいけれど、その色は白だった。

そんな光景を無関心に見つめる俺は、遠くから近付いて来る足音にだけ集中していたんだ。

その音は金属が金属を踏みつける様に、重い音で、俺は地面が金属である事に気付いた。

その時、同時に自分の体がまだ、小学生ぐらいの子供、ウィルのように小さくなっている事に気付いた。

(……………夢か?)

多分、子供の頃の夢を見ているのだろう。

聞いていた足音が止まった時、まだ小さい俺は目の前に居る人物に向かって走り出していた。

『。今日はどうしたの?』

俺がまったく知らない人物の名前を呼ぶと、その人物は頭に被っていたフードをとって何か話すのが分かった。

それにしても、子供の俺はさっきまでの無関心ぶりが嘘のように、笑顔を見せていた。

『。?』

これも全く記憶に無い会話と人間に場所。フードをとった顔もぼやけていて、男か女かすら分からない。

何を話しているのか、聞こうとしても、記憶の中の人物に話せる訳もなく、またフードを被り、来た道に戻る姿を見送る事しか出来なかった。

その時の……重い足音が耳によく残っている。

小さい俺は音が消えてなくなるまで、ずっとその後ろ姿に手を振っていた。

時間の感覚は薄れてきていた。目に映る景色も白から黒に変わってきていた。

(ここ、どこなんだ……)

だんだん、何も考えられなくなってきた。

眠るように、目を閉じる。

起きようと目を擦るが、急に襲ってきた、眠気には勝てなかった。

「夏樹!」

突然、耳の近くで大きな声が聞こえて、目を開けた。

「……………」

まだ視界がぼやけていて誰だか分からなかった。それに体が重い、徹夜明けの寝起きが悪い時に似てる気がする。

「バカ……心配するでしょうが……!!」

殴られた。その時やっとクリスが俺に背を向けているのが見えてきた。

少しづつだが、視界もはっきりしてきた。が、目の前の光景にまた視界が揺れる。

「おい!? その傷……」

背中は大きな円を描いた様に焼け焦げていて、いつも着ていた学校の制服は、腕と胴周りだけで辛うじて繋がっている。それで、なんとか服としては機能していた。

「つうつ〜!? 触るなバカ!!」

「あ、ごめん!?」

他にも、脇腹に手を当て深く剣で斬られた痕のようなモノを止血していて、左手では杖に魔力を集中させて、前方から来る魔法攻撃を防いでいた。

「誰が、こんな事!？」

「……それ、本気で言ってる!? 前を見なさいよ、前を……!!」

クリスの声が響いた時、攻撃がぴたりと止んだ。

目の前の土煙が風で流された時、目に入ったのは赤く染まった景色と一人の女だった。

「昂」

山の木々は森全体に移るように火を連鎖させて燃えていた。すると、パチパチと音をたてて火の粉を空高く舞い上げる。

その光景は蒼白い空から赤い雪を降らせているように思えた。

「……………違うよ、あれはもう昂じゃない」

その言葉が胸の奥を締め付ける。

俺は沸き上がる感情を抑えられなくて、声を荒げて言った。

「昂じゃないか！！ だって…さっき普通に話してたろ！？ お前も見て」

まるで無駄な言葉を切るようにクリスは口を開く、

「酷なようだけど、殺らなきゃこっちが殺られるのよ？ 私は犬死になんてしない、あっちが元はなんであつても今は、違う存在なんだつたら、私は迷わず殺す……………」

その言葉にクリスの目から、殺気が消えていないのが判る。

その感覚は、敵なら俺だろうと斬り進むぞ、と言わんばかりの迫力だった。

「……………まっそれも、この状態じゃ無理だけどね」

そう、自分の体を見ながらばやく。脇腹の傷からは血が流れる出

るのが、止まっていなかった。

「クリス……」

その表情は、何故か死を受け入れているように思えた。それなのに、凄く穏やかで優しい感覚にさせてくれる。

昴からは魔力が溢れだして、俺やクリスを睨みつけるようだった。

アイツの中には何が居るんだろう。

「ねえ……もう終わり？」

“ソレは”昴の声で、“ソレ”は昴の仕草で俺達に話しかけてくる。

「はあはあ、っ、間に合った……かな……？」

『最悪の場面みたいね』

『はあ、もうヤダなー、こんな状況俺、苦手なんだよね』

突然の乱入者の声に一瞬空気が和らいだ……気がした。

「お前ら、なんで……」

「詮索は後でね、とにかく今はあの……って昴!？」
今頃気付いたのかよ……

『あら、ほんとね?』

『おつ、なかなかいい魔力してんじゃん』

一人だけ着眼点がズレてるぞ、糞首輪！！！！

……………ん？

「うわああああ、首輪を一人称で呼んじまった！！！！」

「アンタもよ！！！！」

クリスに怒鳴られて場がまた緊張感に包まれた。

「とにかく今は一旦退くのが得策よ。私、魔力残ってないし戦えな
いわ」

無駄に龍を召喚したのは何処のどいつだ……

ゴツッ！！！！

「とにかく逃げるわよ」

「はい」

『分かったわ』

『面白くねえの』

「はい……………」

軽く頭を押さえてる夏樹が気になるが、何があったかはご想像にお任せするとして、

「もっ、いいの？」

昂の声とほぼ同時、蒼白い空が縦に引き裂かれて、巨大な紅い剣が顔を覗かせた。

「……………」

俺はその剣が何か分からなかったが、今の状態をさらに悪化させる物であるのは分かる。

紅い剣からは血のように流れ出す魔力が街に降り注いで、削りるように地面に剣の形を作り突き刺さっていく。

『とにかく今は退きます！！！！』

ナツと俺達の周りに風が集まり回転する。それはナツと最初に出会った時のようだったが、火で燃えた木の葉が巻き込まれていくのは、最初と違い魔法だと心から感じさせてくれた。

（やっぱりナツも魔法使えんだ……って猫が使えるのっておかしいよな）

瞬間、目の前の景色が都庁2の建物の前まで移っていた。

「これも、魔法なんだよな……………」

『違っわよっ？』

……………はい？

今なんとおっしやいましたか？

「くっ……」

クリスが崩れるように顔から地面に向かって倒れこむのを支えた。やはり怪我の状態がよくない、血を流しすぎてる。医学の知識は無いに等しい俺でも、クリスの体に負担がかかりすぎているのは分かる。

いくら破壊神と言っても人間と構造上は、たいして変わらないのだ。

「ウィル！！ なんとかならないか！！？」

「ちょっと待ってね……」

ウィルがクリスの前に立ち、傷の状態を見て呪文を唱え始める。

「俺が回復の魔法を使えたら……くそっ！！！」

ウィルが使っているのを見ると、自分が全く役にたてない事ばかりだと気付かさせられる。

『バカ夏樹。お前には一生使えないよ』

「なんだと、糞首輪！！！」

首輪と本気でケンカしそうになるのをナツに止められる。

『夏樹……。まあ蜜柑の言う事も嘘じゃないのよ？ 現に私は回復魔法は使えないわ。私ができるのわ緩和魔法の領域までね』

「?????」

「ん……簡単に言うと、最初に素質が必要なのよ。誰でも回復できたら、医者なんてもんいらないでしょ?」

あつ……

「それにね、回復魔法は他の魔法と違って一つの力を完璧にするのに数十年は必要とされてるの。わざわざそんな年月をかけて憶える人が少ないから回復魔法は流通しないのよ。私は緩和魔法を使えるけど、体にかかる負担を誤魔化して無しにするだけだから、あまり使える魔法でもないのよ」

そんな設定まであったんだ……

「おい、アホ夏樹。最近その作者統一型に甘えすぎだぞ!!!」

うつ……痛いところついてきたな。

そんな馬鹿な事をやっている内にウィルの魔法も終わり、クリスがやっと目を開いた。

「夏樹……生きてるんだね、私」

少し悲しい表情になったのが見えたが、あえて触れないようにした。

俺にはなんて言ってやればいいのか分からなかったから。

「夏樹……昴を殺して。あのままにしとけば、東京は喰われるわよ……化け物に……」

空を指さす手は震えていたが、言葉が続ける。

「あれもね……前の大戦で破壊神が創った魔法の一つ。その力は一年を徹して火の消えない気候……何かも無視した灼熱地獄に変える者。名は“エク”」

『“エクステンダー”世界の終わりを告げる精霊、そう言うね。あの戦争の生き残りは……』

蜜柑の声は何も関心をなさそうに感じたけどその後一言も話さなくなってしまった。

「……そう。前の破壊神は新たな力を生み出す事に関してだけは天才的な才能を開花させていたそうよ、だけど……やりすぎたのね。最後は自分の創った魔法に耐えきれず、影も形も残さずに消えたそうよ」

「だから……このままじゃ東京どころか、世界のバランスが崩れるわよ……」

場が静まりかえるのを破るように、俺は俺自身の思いをクリスに告げる。

「だから、昴を殺せて？ それは絶対に出来ない。昴の命だ昴に決めさせる」

クリスが少しイライラした言葉を口に出す寸前で、
「どうやっ」

「どうやって、なんて決まってるだろ。アイツの中の奴を黙らせて
昴を引きずりだして、話す!」

夏樹の言葉は驚くほど適当だったが、何故かここに居る全員が出
来ると考えてしまっていた。

「分かったわよ……でも自分の命を一番に大切にしておいてね」

笑顔で言うともた少し眠ると言って目を閉じた。

「夏樹、僕は君が戦うのにあまり賛成は出来ない」

「私もね……貴方が戦っても世界バランスを崩してしまえば、
私達が貴方を殺さなきゃならなくなる」

二人は俺に詰め寄る様な圧力をかけてくる。

「あーあー、もううっとうしい!」

首輪から姿を変えて俺に詰め寄ると、蜜柑が言った、

「俺は賛成だ。ムカつくがこれでも信用してるんだ。お前が必ず決
着をつけると俺様に約束するならコイツら二人は任せとけ!」

なっ、と驚く二人をよそに俺は返事をした、

「絶対決着はつけてやる! だから……ここは頼んだ!」

俺は走り出した、あの火の山に向かって。

「方針に、口を出さないで欲しいな……」

『そうね……蜜柑、後で酷いわよ』

『おゝ、怖っ……と、まあやりますか』

蜜柑が腰にかけたホルダーのボタンを外し銃に手をかけて、左手に持つ錘と呼ばれる武器を地面にめり込ませる。

「意見が割れるのも久々だから、少し手加減できないかもよ？」

ウィルはポケットから有り得ない大きさのマシンガンを取り出して構える。

『そうね。“意見が割れたら戦って勝った奴の言うことを聞く”……だったっけ？』

ナツは少し体勢を低くして獲物に飛び付くチーターのような姿勢になった。

『夏樹を少し大人にするチャンスだろ

！！！』

妙なところで戦闘が始まったとも知らず、夏樹は今は火の海となつている山に向かって走っていた。

第二十一話 大切なのは本人の意思（後書き）

やっと次回が最終話となりそうです。（泣）ごめんなさい……今までの小説を読んだ方への精一杯の謝罪です。適当な部分が結構あつて読みにくいにも関わらず今まで読んで下さった方は神様・仏様・王様より偉いと私は思います（泣）今まで読んで下さった方は後一話で……この神様の事情……“第一部”が終わりなので、頑張つて読んで下さいね（笑）……何か変なモノでも見た的な視線をやや感じますが、そこは気付かなかつたフリで通します。ええ通しますよ。

第二十二話 過去と未来に繋げる希望

数時間前

(貴方と未来を見たい……………過去に捕われないで……………
……………ずっと一緒に……………)

そう願う事は悪い事じゃないよね？

……………ダメじゃないよね？

でもね、夏樹。

……………私もうダメみたい。

目の前に居る筈の夏樹の背中がすごく遠く感じる。

私の中に、何かが入ってくるのが分かる。

そして、これが“最後”になると感じた。

だからかもしれない……………

私の目が開いているうちに、一粒の涙が頬を流れ落ちた。

すぐそばに居る好きな人。

助けてほしい……………ただ夏樹が傷つくのをこれ以上見たくない。

夏樹の未来みちに、これ以上重荷になるようなモノを置きたくない。

この選択が正しいかなんて、私には分からない。けど、こんな力、抑えてみせる。……………頑張るから、だから

その強く想いを籠めた言葉を飲み込んだ。

私が最後に願ったのは。

『一度だけでいい……………一度だけでいいんです。神様、夏樹ともう一度だけ逢えますように』

山頂に近づくにつれて体が軽くなっていく。

神にやられた傷が、完全に治ってきたんだろう。さっきまで死にかけていた俺がこうやって動いているのは、クリスの魔法のお陰だ。でも、すぐに傷が消えるような便利な魔法^{もの}では、無いみたいだ。

(改めて考えるとすごいな……………)

走り始めて一時間、山の頂上が見えてもいいころだ。

そんな事を考えていると周りの火の勢いが急に弱くなっていった。

(あと少しだな……)

気持ちを切り替えて走る。

山頂には昴が居る。

昴の中に居る神をどうするか……考えて答えが出る問題じゃ無い。だが、考えないと、どうする事も出来ない。

(昴っ!!!!)

空を見上げると、蒼白い空が見えた。

さっきまで戦っていた跡が地面のいたるところにある。

それに空から降る、赤く漏れだした魔力の雨はこの山を中心にも降り注いでいた。

『 来たんだ? 』

少し高い昴の声が耳に直接響く。

目の前の昴の姿は、まるで捕われのお姫様を想わせる純白のドレス。だが、背中には白い羽がある。それは、まるで天使のようで

「……………お前、いったいなんだよ!？」

ふざけた格好をさせられた昴の姿に、怒りが込み上げる。

『 ふふふ。“君”の最後には、ふさわしいと想っけど? 』

自分の身体を、ゆっくりと這わせていた手を、顔の前で止めた。

『人間にはもつたないくらいの身体……』

不気味に口元を緩ませる。

『壊したくなるくらいに……ね?』

浮かべた笑顔とは裏腹に冷たく氷つくような風がまとわりついてくる。

その瞬間、昴の手が空にかざされる。

空に現れた巨大な剣が、光を帯て小さく術者である昴の手に収まるぐらいの剣になった。

『でも　その前に、貴方には死んでもらわなくちゃならないの。まっ“命令”でね、こっちにもいろいろと事情があるのよ。大人しく死んでくれたら、痛くしないけど……どう?』

「誰がお前なんかの言いなりになるか　　! ! ! !」

そうして、望まない戦いが始まるうとしていた頃。

山の上にある巨大な木の、枝に座りながら観戦してる二人と一匹。

『蜜柑……あの子……』

何故か“蒼い髪”に変わっている蜜柑が人間の姿のまままで答える。

「分かってる！ 大丈夫だから……ってか勝ったのは俺だぞ？」

誇らしげに言う蜜柑の言葉を潰すようにウィルが戦いから目を離さずに言う。

「だから仕方なく見物してやってるんだし……」

その横顔からは不安とは違った“何か”が感じられる。

『……まあ、いいわ。とにかく今は祈りましょう、夏樹が勝つ事をね』

昴の手に握られた剣は、赤黒い光を放っている。

それにたった、一振りするだけで、大気を振るわせる。

“この剣は在ってはならない”と世界が言っている様に。

だが、諦める訳にもいかない。

一度決めた事を、やめる事はしたくない。

『ふーん？ まだついてこれるんだ？』

振り上げて剣を止めて、立ち止まる。

『でもね、貴方の考えは甘すぎるわよ』

「!?!?」

心を読まれたように、奥に触れてくる。

『殺し合いをしながら、この女を助ける？ 笑わせないで』

そんな事は最初から分かってる。

こっちは、無理を承知で助けようとしてるんだ。

『 最初に最後だけど、これだけは教えておいてあげる。それは“無理よ”』

「っ !?」

そんな不確かな言葉が、決心を揺るがせる。

いや…… 最初から決心など出来てはいなかったのかもしれない。

俺の考えている事は、ただの“理想”にすぎないって事ぐらい。

そう、最初から分かっていた。

ああ、そうだよ 認めたくなかったただけだ。

『この体の持ち主の魂は、もうこの世界には存在すらしていない』

これ以上、大切な人が周りで死んでいくのを見たくなかったんだ。だから、理想をみんなにも押し付けた

無理だつて事ぐらい分かっている。

でもな、それでも諦められない事だつてあるだろ？

『神の魂が人間の杯なかに入るだけでも人間は壊れそうになるのよ？

魂なんてとつくに潰れて無くなってるわよ』

長い沈黙で、空気が凍りつく。

言われるまでもない。

俺の答えはもう決まっているんだから。

悩む必要なんて最初から無いんだ

「……………言いたい事はそれだけか？ なら 一こつちから行くぞ……………」

体が沈み、地面にめり込んだ右足の骨が悲鳴をあげた。

その瞬間、確かに踏み込んだ右足は折れていた。だけど、痛みなんて感覚は無視する。

今は、そんな事を気にしてる場合ではないんだ。

体で風を切るように前へと進む。

一歩進むと、左足も不気味な音をたてながら折れた。

二歩進むと、折れた右足が曲がるはずの無い方向に曲がっているのが見えた。

三歩進んだ時には、体が麻痺して全身の感覚が消えていた。

神が啞然としているのが見える。

だが、それも遅い。
俺の剣が昴を貫くまでに、アイツの持つ剣で俺を止める事は出来ない。

このまま行けば 間に合う。

そう……このまま、昴にこの剣を突き刺せば全て終わる。
あのエクステンダーは消滅して、この東京は助かる筈だ。これ以上この世界に生きている人は死ななくてすむ。
だが、それは同時に昴の死を受け止めた事になる。

(……………俺は)

“一をとって百を殺すか、百をとって一を殺すか……お前が決める”

その瞬間……そんな声が聞こえた気がしたんだ。

木々の香りに乗せた風が吹いた。

青白かった空が夕暮れの淡い赤色に変わっている。
山を包んでいた炎も嘘のように無くなっていて、街の様子も戦いの前と変わらない景色になっていた。

「!?」

夏樹の手は紅く染まっていた。

「……………バカ。ちゃんと殺してくれないから、っ
自分で動かなくちゃ死ねなかつたでしょ!」

目の前に神の存在は無く。

それは、いつもの昴だった。

「な、なんでお前!?!」

「バカ、何でかなんて私に聞くな。それに……………せつかく会えたのに、少しは嬉しそうにしなさいよ」

本当に昴だ　　いや、素直に嬉しい……………だけど、お前、

「何で自分から」

あの瞬間、俺は昴から剣を外していたんだ。

こいつが自分から、剣に飛び込んでこなければ、こんな事にはならなかったのに

「ごめん。これ以上夏樹の負担になりたくなかつたんだけどね、っ
仕方なかつたの」

咳き込む昴の顔は、どんどん色が無くなっていく。
それは消える様に透明に……

「でも “最後” に会えてよかった……夏樹の顔。見れて……
…本当によかった」
「バカ!!! なら……なんで自分から ……!? 訳分かんねえよ!」

「ごめん。それだけしか言わない昴に、自分が殺してしまった怒りとも似つかない何かがあった。

そして、短い沈黙。

昴の苦しそうな息遣いで、少し頭が冷えてきた。

「俺この方こそ悪かった。まだ気持ちの整理がつかないんだ……」

「うっん……私が夏樹の重荷になっちゃったのは事実だから……」

もうすぐ昴が消えてしまおうと言う実感が全然無いからかもしれない。
い。

それに昴は剣が刺さっているのに、もう何とも無いみたいに笑っていた。

「ふふ。でも本当に夏樹に会えてよかった。神様に願ったのがきいたのかな？」

また笑っている……。そうか、もう昴は痛みを感じていないんだ。粉のように空に散っていく昴の体は、人間の死とは確実に違う。神の死と言う方が正しいのかもしれない。

「なあ、昴……俺は」

「死ぬ前に変な事言わないでくれない？ 私は笑って死にたいの」

顔を背けた昴の目は、もうこれ以上言ったら泣きそうだった。

(ごめん それでも俺は言わなくちゃダメなんだ)

その緊張を感じたように、風がやんだ。

「昴 あの時の返事は」

息を飲む。
心臓が破裂しそうだった。

「うん……何？」

答えを言う。それを言えば死ぬ前に、また傷付けてしまうのに……

「ごめん。お前は俺の中で大切な家族なんだ……」

そう、静かに告げた。

「やっぱりかー。分かってたのに聞いちゃった。夏樹も結

「構ひどいよねー？」

「い、いや。別に好きな奴が居てダメな訳じゃないんだ」

しっ、と口に手を置かれて止められる。

「それ以上は……」

俺も少しどうかしている……冷静になれていない。

どうして、昴がこんな事に巻き込まれなきゃいけないんだ。

「夏樹」

いつも俺の周りの人は、俺をおいて死んでいく。なんでこんな……

「夏樹！」

「えっ」

「えっ……じゃないよ。私は別に夏樹のせいで死ぬわけじゃないでしょ？ それにその答えは最初から分かってたし。もし、嘘なんてついたら一生恨んでやったわよ」

強がった笑顔が痛々しい。

昴の手は、もう触れられなくなっている。

肌が透けてきている。

「……………昂」

「つ」

もう声すら出なくなっているのか。
その寂しそうな表情を見ている事が辛かった。

「……………なんだ？」

口を開いて、必死に伝えようとしている。

な つ き 。

もう別れの悲しみは無い。
昂が消えた後の事なんて、考えられないんだ。
それに……………この最後の時間を大切にしたいんだ。

それでも涙は止められない……………
だけど、最後の言葉だけでは受け取ってやらなくちゃダメだと、
目を拭った。

あ り が と う

止まっていた風は、吹きはじめた。

そして、空気に溶けるように消えてしまった昴の表情は、今までに見た一番の笑顔だった。

何でだよ……。

泣き顔は、もうぐちゃぐちゃだ。

……昴に見られなくてよかった。

その、泣き声だけが、静まりかえった街に響いていた。

第二十二話 過去と未来に繋げる希望（後書き）

まだまだ酷い文章力ながら、頑張って書いていたので読んでもらえて嬉しい限りです（泣）

今回が第一章で次回からは第二章がありますので、読んでもらえたら嬉しいです。

まあ今回不備な点を次回作では直していきたいと思ひますし、こっちも修正を重ねて『読める作品』にはしたいと思ひますので、今後ともお付き合ひ願ひたいです（苦笑）

とにかく、続きが気になるな！。

と思われた方は、第二章を待つてあげてください（苦笑）

そして、最後になりましたが、長い間ありがとうございました。

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

PDF小説ネット発足にあたって

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7758a/>

神様の事情

2009年6月30日19時47分発行